萬葉集略解 二

柳田文庫
文庫11
A 104
4

萬葉集卷第二

相聞

難波高津宮御宇天皇代

磐姫皇后思天皇御作歌四首　或本歌一首　古事記歌一首

近江大津宮御宇天皇代

天皇賜鏡王女御歌一首　鏡王女奉和歌一首（鏡女王とすべきを誤りて王女とせり下皆同じ）○内大臣藤原卿娉鏡王女時鏡王女贈内大臣歌一首（娉を嫂と誤る下皆同じ）　内大臣報贈鏡王女歌一首（本文臣の下藤原卿三字あり）○内大臣娶采女安見兒時作歌一首（本文臣の下藤原卿三字あり）○久米禪師娉石川郎女時歌五首○大伴宿禰娉巨勢郎女時歌一首（巨を臣と誤る）巨勢郎女報贈歌一首

文庫 11
A 104
4

柳田泉文庫

48 10642

明日香清御原宮御宇天皇代

天皇賜藤原夫人御歌一首　藤原夫人奉和歌一首

藤原宮御宇天皇代

大津皇子竊下於伊勢神宮還上時大泊皇女御歌一首（本文還上を上来とし御作の下作の字あり）○大津皇子贈石川郎女御歌一首　石川郎女奉和歌一首（とく本歌の字を脱とり）○大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占露其事皇子御作歌一首○日並皇子尊賜石川女郎歌一首（女郎字曰大名兒）○幸吉野宮時弓削皇子賜額田王歌一首（本文賜を贈與ふ作る）額田王奉和歌一首○従吉野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌一首○但馬皇女在高市皇子宮之時思穂積皇子御作歌一首○勅穂積皇子遣於近江志賀山寺時但馬皇女御作歌一首（女を子と作る）○但馬皇女在高市皇子宮時竊接穂積皇子之事既形而後御作歌一首○舎人皇子御歌一首　舎人娘子奉和歌一首○弓削皇子思紀皇女御歌四首○三方沙彌娶園臣生羽之女未經幾時臥病作歌三首○石川女郎贈大伴宿禰田主歌一首　大伴宿禰田主報贈歌一首　石川女郎更贈大伴宿禰田主歌一首○大津皇子宮侍石川女郎贈大伴宿禰宿奈麻呂歌一首○長皇子與皇弟御歌一首○柿本朝臣人麻呂従石見國別妻上来時歌二首并短歌　或本歌一首并短歌○柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與人麻呂相別歌一首

挽歌（ここに竹林樂三字誤て入る）

後岡本宮御宇天皇代

有間皇子自傷結松枝歌二首（一を二と誤）○長忌寸意吉麻呂見結松哀咽歌二首　山上臣憶良追和歌一首○大寶元年辛丑幸紀伊國時見結松歌一首

近江大津宮御宇天皇代

天皇聖躬不豫之時太后奉御歌一首　一書歌一首○天皇崩御太后御作歌一首（本文崩御の下之時倭の三字あり）○天皇崩時婦人作歌一首　未詳姓氏　天皇大殯之時歌二首　大后御歌一首　石川夫人歌一首○從山科御陵退散之時額田王作歌一首

明日香清御原宮御宇天皇代

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首○天皇崩時太后御作歌一首　一書歌二首○天皇崩之後八年九月

九日奉為御齋會之夜夢裏習賜御歌一首

藤原宮御宇天皇代

大津皇子薨後大来皇女從伊勢齋宮還京之時御作歌一首（本文二を一に作る）○移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌二首○日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌　或本歌一首○皇子尊舎人等慟傷作歌二十三首（本文舎下宮の字を傷と作る）○柿本朝臣人麻呂獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌○明日香皇女木缻殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌○高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌（今宮を脱）或本歌一首○但馬皇女薨後穗積皇子冬日雪落遥望御墓悲傷流涕御作歌一首○弓削皇子薨時置

始東人作歌一首幷短歌○柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首幷短歌　或本歌一首幷短歌○吉備津釆女死後柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌本文後ト時ニ脱○讃岐狭岑島視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌○柿本朝臣人麻呂在石見國臨死之時自傷作歌一首今本ト人ヲ誤○柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首○丹比真人名闕擬柿本朝臣人麻呂之意報歌一首　或本歌

寧樂宮

和銅四年歳次辛亥河邊宮人姫島松原見孃子之屍悲嘆作歌二首○靈亀元年乙卯秋九月志貴親王薨時歌一首幷短歌本文年の下歳次二字、時の下作の字、幷短歌二字を脱　或本歌二首

相聞　是ハ相思ふ人々を互に告聞ゆれバ、ここハいつか後の集に恋といふにひとし、されど此集にハ親子兄弟のおもひしみ思ふ事をもしのせたること廣きなり。

難波高津宮御宇天皇代　大鷦鷯天皇　後に仁徳と申す

仁徳紀元年正月難波に都し給ひて高津宮といふよし見えたり

磐姫皇后思天皇御作歌四首

仁徳天皇の后、履中紀に葛城襲津彦が女とあるし、履中天皇の御母なり、皇后の御名ハいふべきにあらねど、後人の志るしたるなるべし

君之行氣長成奴山多都禰迎加將行待爾可將待

きみがゆきけながくなりぬやまたづねむかへかゆかむまちにかまたむ

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉

是ハ皇后の御歌にあらねども誤て入たるか、此集にハのせざるべし、皇后の御歌なれども

如此許戀乍不有者高山之磐根四巻手死奈麻死物乎

かくばかりこひつゝあらずは たかやまのいはねしまきて しなましものを

此歌ハ磐之媛后の御歌也。こひつゝあらずハかくこひつゝあらんよりもと
いふ意也。集中此類あまたあり。皆なずらへ知べし。巻四かく計恋つ
あらずハ石木にもならましものを物もおもはずして。高山のいはねハいづくも
あれ山に葬らんさまをいへり。まくハ枕にする也。しなましものを
ハ死なんものをといふ也

在管裳君乎者将待打靡吾黒髪爾霜乃置萬代日

ありつゝもきみをばまたむうちなびくわがくろかみにしものおくまでに

ありつゝもハ長くて末ながくまでまたんと也。巻五かくろき髪にいつ
のまにか霜の降らんとよめり。藤原家隆の歌に八打まで白髪と霜
とのみもよみられど此歌ハ仁徳の御時なれば古きハいまだ其の

るまでハあらじ。是ハたの此歌の意又ハ巻十二君待と庭にのみをれバうち
なびく吾黒髪に霜ぞおきにけるまでまちて古歌の詞にもよくも
きこぬ人の古語なるなるらん。此歌ハ巻十二の歌ハ夜に一夜の
ふりゐしく霜の事とよめる也

秋之田穂上爾霧相朝霞何時邊乃方二我戀将息

あきのたのほのへにきらふあさがすみいづへのかたにわがこひやまむ

きらふハくもるといひて朝の詞也。霧もハくもりの雅の詞也。いづへの
かたハいづれの方といふ也。巻十九伊頭敝能山乎鳴か越ゆ
むとよめり。いづかたへ思ひをやりてか忘れんとなるなり。いかにも田
面の霧の立こめて晴るかたなきに喩へたるなり。古くハ霧山のきりて
とよみて、ほ草のなく、霧ハ春霧ハ秋のおもしたるなし

或本歌曰

紀ニ遣ヲ追ニ作

居明而。君乎者将待。奴婆珠乃。吾黒髪爾。霜者零騰文

みあかしてハ起ゐてゐて、君十八年里安加之こよひハのちんとてもよりかゝ、
君ハたの立てもいつをバ見まぐ、居明してさまらハ霜の宿よ
しそ白髪となれるまゝあらば

右一首古歌集中出

古事記曰。軽太子奸軽大郎女。故其太子流於伊豫湯也。此時衣通王不堪戀慕而追往時歌曰。君之行。氣長久成奴。山多豆乃。迎乎将往。待爾者不待。此云山多豆者是今造木者也

衣通王ハ軽大郎女の別名也、此歌を唱へ、謂ゝ里讀人とて
謂ふるハ歌の也しかし、まゝるを前の歌謂られバ後人の文にてよ紀し
哉ゆるとみゆ、凡ハ宿せてハおまかしめくまとさゝるゆ紀まハえ語縁ども
いさくおまゝ出るまゝ八山たつ能を添て謂てられバことこそわざかし、

山たつの事ハ冠辭考にあらはしたのあとにも本文に挙しハ謂かり、
かれらハ改て注とせらし

右一首歌古事記與類聚歌林所説不同。歌主亦異焉。因撿日本紀曰。難波高津宮御宇大鷦鷯天皇廿二年春正月天皇語皇后。納八田皇女将為妃。時皇后不聽。爰天皇歌以乞於皇后之。三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀伊國到熊野岬。取其處之御綱葉而還。於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中。時皇后到難波濟。聞天皇合八田皇女大恨之云云。亦曰。遠飛鳥宮御宇雄朝嬬稚子宿禰天皇廿三年春正月甲午朔庚子木梨軽皇子為太子。容姿佳麗。見者自感。同母妹軽大娘皇女亦艶妙也云云。遂竊通。乃悒懐少息。廿四年夏六月御羹汁凝以

紀納ノ上曰字有。元三ノ上之ノ字ナクテ云云トアリ。岬ヲ今峠ニ誤

稚ヲ今雅ニ誤

紀御下賸字有。宮美ヲ今美ニ誤。凝ヲ疑ニ誤

作氷天皇異之卜其所由卜者曰有内亂盖親親相姦乎
云云仍移大娘皇女於伊與者今案二代二時不見此歌
也

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇　俗に天智と申して

天皇賜鏡王女御歌一首　鏡王女とあるハ誤なるべし鏡女王なり下皆
同じ此女王ハ額田女王の姉なり此姉妹ともに天智天皇にめされ
たまひしなるゆへ御の下製の字脱たるべし

妹之家毛繼而見麻思乎山跡有大島嶺爾家母有猿尾
いもがいへもつぎてみましをやまとなるおほしまのねにいへもあらましを

一云妹之當繼而毛見武爾　一云家居麻之乎

和名抄大和国平群郡額田にあれバ此女王ハそこに住給へるなるべし、
近江へ遷ませし後も此女王ハ大和に居給ひし故にかくハよみ給へるなるらん、
さらバ大島嶺も平群郡にあるなるべし、つぎてみましをハ、引つづき
て見んやとなるを、御住給ふ女王の方を見ましとのたまふなるべし

鏡王女奉和御歌一首　鏡王女又曰額田姫王也

たまいつるなく王女ハ女王の誤也、さて此説ハ額田姫王と同人とせし誤れ
る後人の書入也、歌の上御の字目録にあるをよしとす

秋山之樹下隠逝水乃吾許曽益目御念従者
あきやまのこのしたがくれゆくみづのわれこそまさめみおもひよりハ

遊元暦本逝に作る、隠れてとりそもかくとらうハ隠く、秋ハ水の
あれバ、此下水の増るをかりて御念よりも増りてあれと云也

内大臣藤原卿娉鏡王女時鏡王女贈内大臣歌一首

藤原卿ハ鎌足なり、王女ハ女王の誤也、此女王此時天皇の寵おとろへさ
るを経てよみ給ひしなるべし

玉匣覆乎安美開而行者君名者雖有吾名之惜毛

たまくしげおほふをやすみあけていなばきみがなはあれどわがなしをしも

たまくしげ枕詞、匣の蓋ハおほふすも安しといふをあくるといひつゞけ
たまきて夜の明るまでゐひのけたる序のみ、こゝの意ハ佐よひての
まゝに夜更れどもゆかれぬを、女王のゆるしていひいだせるなり、
さて此る君吾二字互に誤りつらん、わが名ハあれどきみが名し
をしからんといふべし、云故ハ此次に、こゝろハあれど君が名をしといふ、
まで君が名を人の知る事を恐れて、ちゝれたりける、女しみて
さなくとも明る事をしてわへ、宮ちハむくしげハ開るへかれて、覆ハ字
の誤れるにやといへり

内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首　王女ハ女王の誤く

玉匣将見圓山乃狭名葛佐不寐者遂爾有勝麻之目

たまくしげみむろのやまのさなかづらさねずはつひにありかつましも

或本歌云玉匣三室戸山乃

たまくしげ枕詞、みむろ山とハ三輪といふ、みむろと同じく、いつく
にもあれ、さなかづらハ和名抄に五味佐祢加豆良といへるを、こゝにてハ
さねずハといはん序のみ、さねハ寝なり、不寐ハさねずと訓べし、
てましハ左訓のごとよむべし、ましハ助辞なり、ぬるに紹
れとの事なり、遂に逢ずしてハ堪ずといふ也、或本の三室戸山
といへるハ誤なり、玉くしげ見諸戸山と書るハ據のとの事の本
なり、西国のあたりを見れバ備中国のみむろなどなるべし、又
珠洲にも三室戸といふあれど、後のものにて、八大和の都にて、備
中のみむろとよむべきならで、古へよりて他国の地名を詠よ
む事うたまさりたるなれバ、ずし、按ずるに或本の戸ハ乃の誤なるべし

今篶ヲ薦ニ誤

内大臣藤原卿娶采女安見兒時作歌一首　采女ハ古諸國より女をあしよらかしよろしくて、國ノ國造郡司などの女兄弟姉などを撰て貢たてまつると見えたり

吾者毛也安見兒得有皆人乃得難爾為云安見兒衣多利

われはもや　やすみこえたり　みなひとの　えがてにすといふ　やすみこえたり

此ハ卿歌まで、吾ハおのれや、安見子ハ此采女の名なり、皆人ハ此采女を思ひかけしれどさらにえがたきとされハそれをしもはらとわがものにしたるをよろこびてよみたまへる也

久米禪師娉石川郎女時歌五首　久米ハ氏、禪師ハ名也、下の二首沙弥も見えて同じく續紀に阿弥陀、釋迦なども名とせられしあり

えしられバ是ハ俗人の名也、景行紀郎姫此云異羅菟比咩とあり、又藤原伊良豆賣とも續紀に見ゆ

水篶苅信濃乃真弓吾引者宇真人佐備而不言常將言可

今篶ヲ薦ニ誤
強ハ弦ノ誤

禪師

みすゞかる　しなぬのまゆみ　わがひかば　うまびとさびて　いなといはむかも

みすゞかる枕詞、篶ハ小竹也、薦ハ誤也、弓ハ古ヘ甲斐信濃より貢したればしなぬのまゆみといへり、紀ニ大寶二年信濃國より梓弓一千二十張を献、景雲元年信濃國より弓一千四百張を献、又甲斐國槻弓八十張、信濃國梓弓百張なるよし見ゆ、うま人ハ貴人をいふ、紀ニ君子縉紳良家のうまびとと訓めり、さびハそれさびたるさびと、翁さびのさびに同じ、さてハもとうまく、郎女がうま人なるによりておほく吾をひきおこすそぶりせばいなみあらむといはむ、不言とハ唐めきて不欲の心もちひられたる也

二

三篶苅信濃乃真弓不引為而弦作留行事乎知跡言莫君

郎女

みちぶかるゝまぬのまゆみひのぞしてをそぐるわざとたゞすといひかゝくみ

たゞ都良絃取波氣といふ所弓絃と題をもてそぐるといへバ絃の音ハ梓沖

がいつるごとく絃の緒ゝ、弓をひぬ人のつる題するわざと知といふをなし、こゝ

やく飾をひけゞしてかいふをいふむやいゝかやも知つらんとくいふ之

梓弓引者随意依目友後心乎知勝奴鴨　郎女

あづさゆみひのまにまによらめどものちのこゝろをしりがてぬかも

引かバかんゝハ引まにまにしたがひてよくよるべしハ古今集にひけバかくともよ

るへ引まにまかせてよるべしといふ、弓ふるまでいふこゝろ也、しりがてぬハ

ぬハ知がたきといふがて、ぬといふ也、古同じ詞多く、まれにあり

といふてまへんといふ事よきるがゆへ、巻三萬葉家持(オヘニヲトクニ)莫園と

いふ事の下よ我あしくいふべし、其の事ハ萬ハ引がバよるべきにあれども、

後いふ引いそひゆるむりや

今遊ヲ遊ニ誤 緒ヲ結ニ誤

梓弓都良絃取波氣引人者後心乎知人曽引　禅師

あづさゆみつらをとりはけひくひとはのちのこゝろをしるひとぞひく

つらとハ弦也もと蔓(ツラ)緒のこと也、うるはしひの物とせんて蔓といふ、草の蔓

もと一つなといへり、たゞ絃のことを知るべしといふに答ふる之

東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乗爾家留香聞　禅師

あづまどの乃ざきのはこのにのをにもいもがこゝろにのりにけるかも

荷向ハいづれの国よりも年ごとに奉る調物を荷前と云、是ハ東国より

奉るのざきをつゝみよするのを、それハ箱に納めて細しく馬に結つけて上

るゆへに、荷の緒とのひ、箱といふへ、荷のとしてハ荷の緒のごとくふかく

いふを思ひ也、のるハ巻十四東歌にハ、何をもの絶すず妹ハあぜかもと

許(コ)呂(ロ)尓(ニ)能(ノ)里(リ)弖(テ)可(カ)婆(バ)に謌かけしけといふとかくされハ妹がるすの先

にきんのうつゝあるといふや

大伴宿禰娉巨勢郎女時歌一首　元暦本ニ大伴宿禰諱曰
安麻呂也、難波朝右大臣大紫大伴長徳卿之第六子平城朝
任大納言兼大将軍薨也　とあり

玉葛實不成樹爾波千磐破神曾著常云不成樹別爾

たまかづらみならぬきにはちはやぶるかみぞつくといふならぬきごとに

葛ハ実ならぬものなれバ、その実なきこといはんとて、不成の不までハかゝらぬ歟、集中ニ多し、
樹とハ葛のなきをいふにて、何にてもあれ実なる樹をいふ、ちはやぶる枕詞、
神ぞつくとハ、どのやうな実なる木の実ならぬまハ神の依りて
たゝる讀なりしたがひ、心ハ女のさかるべき時ニ男せねバ神の依りつくに
逢よ男と得んとていふなり。

巨勢郎女報贈歌一首　元暦本ニ即近江朝大納言巨勢人卿之

女也とあり

玉葛花耳開而不成者誰戀有目吾孤悲念乎

たまかづらはなのみさきてならざるはたがこひならめわがこひもふを

花のみさきて実ならぬとハ、言ばかりにて実ぬやくまことなき
ハたがこひならむ、わが戀ハ花のみにあらず、まことあるを
といへるハ、又こひなるべしとの例でし

明日香清御原宮御宇天皇代　天渟名原瀛真人天皇　[謚ニ天武とゆす]

天皇賜藤原夫人御歌一首　紀ニ藤原内大臣の女氷上娘また妹五
百重娘とて二夫人とあれバ、御の下製の字脱しなるべし

吾里爾大雪落有大原乃古爾之郷爾落巻者後

わがさとにおほゆきふれりおほはらのふりにしさとにふらまくはのち

大原ハ続紀ニ紀伊へ幸の路とあるをもて、泊瀬と小治田の間ニ大原と

いふ所ハ今も大原村にて、即藤原といへり、藤原氏の本居也、そこに夫人の
おはし居給ふ時のうたなるべし、こゝもそのかミハ雪多くふりておかしかりし、大原と
ふるへハ後にこそふらめと戯れ給へるなり

藤原夫人奉和歌一首

吾岡之於可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武

わがをかのおかみにいひてふらせたるゆきのくだけしそこにちりけむ

神代紀に斬軻遇突智為三段云々一段為高靇注に靇此云於箇美、
豊後風土記、球珠郡球覃郷此村有泉中略即有蛇靇曰於箇美とも
見ゆ、これ雨雪をつかさどる龍神也、その神におほせてふらせつるを
くだけしのしハ過去のし、御戯言をうけて戯れ給へるなり

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇　今天皇謚曰持統天皇

大津皇子竊下於伊勢神宮上来時大伯皇女御作歌

天武紀太田皇女を納て、大来皇女と大津皇子とを生給ふとあれば弟
なるや、都より大津皇子をおくり給ふ御行ハ此御姉斎王にて居給ふを
とふらひ給ふ也、大伯皇女ハ天武天皇白鳳二年に斎王に立給ひ、
持統天皇朱鳥元年に帰京し給へり

吾勢枯乎倭邊遣登佐夜深而鶏鳴露爾吾立所霑之

わがせこをやまとへやるとさよふけてあかときつゆにわれたちぬれし

大津皇子ハ御弟なれど、女がたよりハ兄とのみいふ例也、後ハあかときと
いふが古語也、こゝのハ略かるべし

二人行杼去過難寸秋山乎如何君之獨越武

ふたりゆけどゆきすぎがたきあきやまをいかでかきみがひとりこえなむ

二人調ひて秋のさびしきをとえば二その頃へのいと悲しくてゆるハ、
大かたとおもひそふるの清別なればなるべし

大津皇子贈石川郎女御歌一首

足日木乃山之四付二妹待跡吾立所沾山之四附二

あしびきのやまのしづくにいもまつとわれたちぬれぬやまのしづくに

山のしづく みちのぞれしづくをいふ

石川郎女奉和歌一首

吾乎待跡君之沾計武足日木能山之四附二成益物乎

あをまつときみがぬれけむあしびきのやまのしづくにならましものを

あハされや

大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占露其事皇子御作歌一首 續紀津守連通陰陽の道勝れたるよし、從五位下を授戸口と

能つるなるゆ

大船之津守之占爾将告登波益為爾知而我二人宿之

おほぶねのつもりがうらにのらむとハまさしにしりてわがふたりねし

大ぶねの枕詞、益ハ借字にて正しくさだかに事の顕るゝ事を、まさしにといふ、爲ハ

うらかたやき麻左氏にてあれバこの爲ハ氏の謀をいふ

正定のことをいふなれバ也

日並皇子尊贈賜石川女郎御歌一首 女郎字曰大名兒也

日並の下知の字有べし、目録ニ脇の字なきをよしとす、又大名兒

三字をと読せる、皇子ハ天武天皇の皇子御母ハ鸕野讃良皇女之

大名兒彼方野邊爾刈草乃束間毛吾忘目八

おほなこををちかたのべにかるかやのつかのあひだもわれわすれめや

大名兒ハ女郎の字也と銘されど、是ハ女をあがめてのたまへるなる

べし、婦をたかね、兒ハなせたまひて、又大名持などかきてほめたる

也、ハ古への束の手ハ一握のはかり、皆の手ハ一つゝ二三の白ハ

元渡海二作

つねのさまといひたる粋なく、初るより末の句へかゝる

幸于吉野宮時弓削皇子贈与額田王歌一首　持統天皇

吉野の宮の幸多くあれバいつとしがたし、弓削皇子ハ長皇子の弟也

歌の上流の字ゆるべし

古尓恋流鳥鴨弓絃葉乃三井能上従鳴渡遊久

いにしへにこふるとりかもゆづるはのみゐのうへよりなきわたりゆく

弓弦葉ハ杜律の蔵言の遺にたとへるべし、いにしへにこふるとハむかしをこふる也

崩御ましてのちも弓弦葉を見るにつけても御父帝の

御入せたまひしことあるれバ、その皇子も同じくこふらさせ給ふ

松に寄せたるべし、ここを集せんやとこひ給ふ

ことも悲しくまつりけむよしを、いにしへとこふるといへる

額田王奉和歌一首　元従倭京進入

古尓恋良武鳥者霍公鳥盖哉鳴之吾恋流其騰

いにしへにこふらむとりはほとゝぎすけだしやなきしわがこふるごと

ほとゝぎすハなくとなきそのこゑをきゝて、わがこふるごとしたふらむ

けだしハ集中けだしくもとよめる若といふことなり

従吉野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌一首　蘿ハ源

山の古木に生る日蔭のかづら也、和名抄蘿日本紀私記日蘿比加介女羅也、和名万

豆乃古介一云佐流加世とあり、遣同訓に遣とあり

三芳野乃玉松之枝者波思吉香聞君之御言乎持而加欲波久

みよしのゝたままつがえははしきかもきみがみことをもちてかよはく

玉ハほむる詞、又ハたぐひまれなる松をたまといふ

の玉ハ圓らかなる心、玉松といひての実ある玉ハ山の蘿之集中山

とひて信まうくるまへし、むかしといへる例あまたあり、はやくハ集中
に波之字や思ひ妻と、愛計八所とてもろくめづる兒、かたハ歎き、思ひき
弓削皇子をとさゝし、遅はくハ遅ひを延ふ、松をまつものつねの言
ひしを、即松の待通ひといひならしたるなり

但馬皇女在高市皇子宮時思穂積皇子御歌一首 卅三人

の皇子皇女法母を異にせる兄弟なれバなり、續紀和銅元年六月三品但
馬内親王薨とみゆ　目録に宮下之の字、御下作の字あり

秋田之穂向之所縁異所縁君爾因奈名事痛有登母

あきのたのほむきのよれるかたよりにきみによりなゝこちたかりとも

歌十句も是と同じきなり、三の句片縁とかゝれれバころもかくよめり
訓かへ、巻十七秋田乃穂牟伎とあれバ、ほむけと訓ハよろし、稲の穂ハ
一すぢによりなびけハ、そによそへて、よりさらハよりなんと思ふゆゑんとゆかれ、

ならんとやられといへるがいしまをたぬあることをあてていへる例あまたより高き
いつまでぞおもふとしハ言痛くいひさわぎるなりしや

勅穂積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女御作歌

志賀山寺ハ天智天皇の建給へる崇福寺也、此ぞさのあどもと思
ふよかつそめよ生ハさまでにハあらで、右の事驚れさるよ依て、此寺ん
うつして法師となるしくるよせかかるべし

遺居而戀管不有者追及武道之阿回爾標結吾勢

おくれゐてこひつゝあらずハおひしかむみちのくまわにしめゆへわがせ

のつておくぞをハおなじ也、おひしかんハおひおよばん也、仁徳紀やさのしろに
いしけとりやま伊辭鶏之鶏とりつゝいハ及諾、しけハ及く也とは同し、
くまわハ道の隈〻とりよ、しめハ山路などをハ先行人のしるべのあと
ゆかといへり、木ちでもて縄引などして標とするものなくつまづきて

うつろひぬべし

但馬皇女在高市皇子宮時竊接穂積皇子事既形而後御作歌一首　今本而の下後の字なし目録によりてくはへつ

人事乎繁美許知痛美己母世爾未渡朝川渡

ひとごとをしげみこちたみおのがよにいまだわたらぬあさかはわたる

人ごとハ人言なり。言痛をこちたしといへり。母ハ助の語にて、おのがよにといふ。

あさ川渡るハ其世の中のならはしにあらぬ事ハ渡り、いもせの川を渡るなどやうにもよみなせり。男女の逢を川を渡るに譬へたる事多かるも、あさ川ハ浅き川なり。人目をよけて朝に渡りゆくハ浅き中ならでしばしのあひだも有しならん。又ハ人目を避けて夜ふかく家に帰りける事なれば、いもせの中の事も忍びさめぬさま也。皇女の方にあひ給へるをよみ給へるか。宮本云、己母世示の示ハ川の河の水の字の誤にて、いもせがはなるべしと言へり

猶考べし

舎人(トネリノ)皇子御歌一首　天武天皇の皇子也。此謌ハ贈與舎人娘子といはず落したるなるべし

丈夫哉片戀将為跡嘆友鬼乃益卜雄尚戀二家里

ますらをやかたこひせむとなげけどもしこのますらをなほこひにけり

男(ヲ)じしき身として、おもひ定めたる人を、恋ひしのびて思ひ数ならず、ゑなけなひやましき事を、しこハ紀に醜女を志古米(シコメ)と訓じ、集中鬼醜を通はしかく、鬼之四忌(シキ)手(テ)式ハ鬼乃志許草(シコグサ)などの鬼もしこと訓べし。しこハ自ら罵ていふ詞也。なかなかにひますらをハ、恋せじとせしかど、恋するよしと

舎人娘子奉和歌一首　娘子ハ詳ならず

歎管丈夫之戀亂許曾吾髪結乃漬而奴禮計禮

なげきつゝますらをのこひみだれこそわがゆふかみのひぢてぬれけれ

二三の句おぼやけのみしかど、たゞまゐらせとのこのこゝろあれこそとおもへれバ、なほ乱ハ
れもこそせめ、こゝろみだれこそハ、忘れバこそのまど思ふなく、ゆひつる髪を別
かずゆひもせむといふ、髪ハ集中に湿漬とかきて、ひづちてあるを、ひぢつき
もゆくひづちといへるをもいへるも、かは水につかりぬれてよわなる意、
考の説ハよろし、ぬれたれバ、集中に多気婆奴礼(タケバヌレ)とかきてねじくず、髪の
ぬるくと、たけのつかね解たるとすも、算ふ細解ともいへる類おほく、人に忘
られバ髪の自ら解くといへる詞の有はよくあるなるべし

弓削(ユゲノ)皇子思紀(キノ)皇女御歌四首　皇女ハ徳様皇女の御ちかく、
御の不作の意なるべし

芳野河、逝瀬之早見、須臾毛、不通事無、有巨勢濃香毛
よしのがはゆくせのはやみしましくもよどむことなくありこせぬかも
一二の句ハ序く、ありこせぬハあれかしと同じく、願ふことく、かくあれかしと

芽ノ今芽二誤

いもとこゝろあはぬことを早瀬によそへたるなり、巻五梅の花今さかりなり散る
ぞこのかたちの国にあそびせぬかもといふ同じく不通ととぢめ訓ハよろし
吾妹兒爾、戀乍不有者、秋芽之、咲而散去流、花爾有猿尾
わぎもこにこひつゝあらずハあきはぎのさきてちりぬるはなならましを
かく恋つゝあらむよりハ死なむかたがよしといふを、萩の花にたとへて
暮去者、塩満来奈武、住吉乃、浅香乃浦爾、玉藻苅手名
ゆふさらばしほみちきなむすみのえのあさかのうらにたまもかりてな
譬喩にて女を玉藻によそへて、妹をとらむといふなり
いそぎて刈てな、名ハかりてんといふに同じ
大船之、泊流登麻里能、絶多日二、物念痩奴、人能兒故爾
おほぶねのはつるとまりのたゆたひにものもひやせぬひとのこゆゑに
一二ハ序で、舟の行つかへてたゆたふをいひて、そこにたゆたふこゝろをたとへたり

とはみえねどそれと思ひえつることをいはでくるしきをかねつるも多
したゆふは差年ゆくのこゆることもよみて、ゆるくて、ひは語のそへにかゆ
ることいへり、大船のかよ浮るはゆらくと動くさまを、細思ふ心をたと
へて、おもひはまたゆめぬほどちかければ、他の思ひのまぎらし人のうちゆかしき
は人のつまなるものをのみ恋ふなり

三方沙彌娶園臣生羽之女未經幾時臥病作歌三首

三方は氏沙彌は名なり又持統紀六年十月山田史御形に務廣肆を授く、
前に沙門に為して新羅に学問しきといふ此人か、臥病の下作の字は時の誤
なるべし沙彌一人のうたとは見ざればや

多氣婆奴禮。多香根著長寸。妹之髮比来不見爾。搔入津良武香　三方沙彌

たけばぬれたかねばながきいもがかみこのごろみぬにかきいれつらむか

元人者皆ト有

たけばたかぬればと句いへるを、たけはなは髪多久までは十二字を
草とし髪あまたらむもなかにあらは、わからづきたるさま髪のちゞみぬれば
ぬるゝと延寛まれば、はお寛れはもちきうなる、きはくまかくそくるを髪あ
げして結ふをかきいるゝといふべきなれば此ごろ病に臥てゆくつくりぬ
に、髪あげしつらむがゆかしきといふなるも、半ば十六まであるとゆかりは
髪上つらむこそして見ゆ、搔入の入は上の誤にてかきあげつらむのなるべし
と宣長もいへり

人皆者今波長跡。多計登雖言。君之見師髮亂有等母　娘子

ひとみなはいまはながしとたけといへどきみがみしかみみだれたりとも

髪のいともちくて髪上るべきなれどもあれば、ぞうねよき人はいでて、まくらのつ人え
袖しきたまをねよかなしと君つれば乱てえらさにまゝまであらむといふか、
伊勢物語にくらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべきと

いつは靴や、さて十五六の頃まてハ髪を高くもちあくるをあけといひ
またはそれ以上を年頃よハ髪いとながく束ぬるがよ、并しく頂へ挙
放ちを髪とよいつハちの女の髪のすがたのよしの多し

橘之蔭履路乃八衢爾物乎曽念妹爾不相而　三方沙彌

たちばなのかげふむみちのやちまたにものをぞおもふいもにあはずして

古へ都の大路市の衢なとにまとふ事とかすかしるや、雄略紀餌香市邊
橘本といひ、又十三東の市の殖木なとゝかきて大道に菓樹
を植られし事も見ゆ。やちまたのや八数の多さをいふ衢の多き
をいふ。ハ一もあらたくて思ふ事の多きをちまたにたとへたれ
妹ハあらぬの姉か行かさきおもひをよせるなるべし

石川女郎贈大伴宿禰田主歌一首　即佐保大納言大
伴卿之第二子母曰巨勢朝臣

遊士跡吾者聞流乎屋戸不借吾乎還利於曽能風流士

みやびをとわれはきけるをやどかさずわれをかへせりおそのみやびを

此遊士風流士ともにみやびをと訓べし。おそのみやびを旧訓御風ハあしく、古訓なを
也それあれど、巻六諸大夫等集左少弁一云宴歌とあるをみ、かゝる家の
遠き後を遊士の遊ぶをとりすさびぞくしといふ事の左右に、右一
首云々蓬莱仙媛所作嚢縵為風流秀才之士矣とあり。此遊士風
流秀才ハ今集の丈夫をさしていふなれば、ここに宮人になあ
ずなくむ、それバいづくにもみやびをとよむべきなり。さて風流人ぞ
よみかしおそくまつるといふことに思ひもしハかならず風流人ぞ
とよみいつるを、於曽のみやびをハ浦島の子の事に出、世に行べきかのを
つらぬいてならすの、於曽やおそしといひてもなるに世中の悪人のと
あるを合せて知べし

大伴田主字曰仲郎容姿佳艶風流秀絶見人聞者靡不歎息也時有石川女郎自成雙栖之感恒悲獨守之難意欲寄書未逢良信爰作方便而似賤嫗己提鍋子而到寢側哽音蹢足叩戸諮曰東隣貧女將取火来矣於是仲郎暗裏非識冒隠之形慮外不堪拘接之計任念取火就跡歸去也明後女郎既恥自媒之可愧復恨心契之弗果因作斯歌以贈謔戯焉

大伴宿禰田主報贈歌一首

遊士爾吾者有家里屋戸不借令還吾曽風流士者有

みやびをとわれハきけれどやどかさずかへせるわれぞみやびをにはある

それと志らぬぞしてうへをしとハいそぎしてかつけなるへく言うさバ、あさそうなるべきことでにかへせしことみやびをる人のせるわざなれといふ也

同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首 目録に同の字中郎の字无

吾聞之耳爾好似葦若末乃足痛吾勢勤多扶倍思

わがきゝしみゝによくにぞあしびのあしなへわがせつとめたぶべし

あしびの枕詞、和名抄蹇阿之奈閉とあり。みゝにきゝしよくにたりとハ、名にきゝしにたがはずといふ事、此十一卷にいへバ耳にきゝしやうし、つとめハ紀に自愛の字をつとめとよめり、たぶべしハ給ふべしと、紀ハ末の條にも讃州之宮をもち若末をかひとハ訓ずし、巻十も考みよ小松之若末ぞしとあれバ、これとよめれバこゝにもあしのうれのとよみて、足痛ハあなへとよとよみんか、若芽ハたゆるのゝあしぞ、一本若生とあるをよろしかなどとよむべしといへり

右依中郎足疾贈此歌問訊也

大津皇子宮侍石川女郎贈大伴宿禰宿奈麻呂歌一首

元恋ヲ恩ニ作ル 良ヲ今郎ニ誤ル 元ニ良ニ作

元暦本侍を待に作る。記に女郎字曰山田郎女也宿奈麻呂宿禰者大納言兼大将軍卿之第三子也とあり、考に云大津皇子宮侍とあるハいぶかし。此宮侍とハ朱鳥元年の秋皇子の事あらハれ皇子薨せられし後ハ他にうつりてあるを、もと皇子の宮にありしにより、婦人に宮侍と附へし名目ありしハ、宮に侍る事をいふなるべし、かくハ書るべし、こゝにさらに皇子薨まして後もかの名目をかくしるせしなるべし

古之嫗爾為而也如此許戀爾将沈如手童兒

ふるひとのおむなにしてやかくばかりこひにしづまむたわらはのごと

ふるびとハ齢のたけしをいふ、和名抄嫗於無奈とあり、續紀老女を音那（オムナ）とよめるも、おむなといふ言の約り、老とは於与奈と訓ましハよのつぶて、たわらはハ母の手さらぬわらはの事をいふなるべし

一云　戀乎太爾忍金手武多和良波乃如

遊ヲ今遊ニ誤ル 元ニ依テ改

長皇子與皇弟御歌一首　此皇弟ハ弓削皇子也

丹生乃河瀬者不渡而由久遊久登戀痛吾弟乞通来禰

にふのかはせハわたらずてゆくゆくとこひいたむわがせいでかよひこね

丹生ハ大和国吉野宇陀宇智の郡に同名あり河を隔てゐ給ふにや、ゆくゆくとハ物思ひに堪ひかねてさまよふさま、巻十二あまのかはらにゆくらのにあ、巻十三大舟のゆくらゆくらになど同じ、戀痛ハいとこひしきを強くいふ詞、愛をめづ痛（メデタキ）といふ類ひのかし、わがせハ親しみ呼ぶ言、こゝへ来れ弟の字を用ひたり、和名抄備中賀夜郡弟翳勢庭妹（尓比奈世）などもあり、いでハ字のごとく物を乞詞なり、允恭紀二年に謂皇后曰こゝ壓乞戸母こゝに記に壓乞此云異提（イデ）戸母此云觀自とあり

柿本朝臣人麻呂従石見國別妻上来時歌二首并短歌

こハ人麻呂朝集使にて、かくて上るなるべし、それハ十一月一日の官舎

咲ヲ今嘆ニ誤ル見ニ依テ改

みあふなれバ石見より九月の末十月の初にこゆべきさまハ人麿の妻のうへハ
考のお記にあし、これハ嫡妻にハあらざるべし
石見乃海角乃浦回乎浦無等人社見良目潟無等 一云礒無登
いはみのみつぬのうらまをうらなしとひとこそみらめかたなしと
人社見良目能咲八師浦者無友縦畫屋師潟者 一云礒者 無鞆
ひとこそみらめよしゑやしうらハなけどもよしゑやしかたハなけども
鯨魚取海邊乎指而 和多豆乃荒礒乃上爾 香青生
いさなとりうなびをさしてにきたつのありそのうへにかあをなる
玉藻息津藻朝羽振風社依米 夕羽振浪社来
たまもおきつもあさはふるかぜこそよせめゆふはふるなみこそき
縁浪之共 彼縁此依 玉藻成依宿之妹乎 一云波之伎余思妹之手本乎 露
よれなみのむたかよりかくよりたまもなすよりねしいもをつゆ

霜乃置而之来者此道乃八十隈毎 萬段 顧
しものおきてしくれバこのみちのやそくまごとによろづたびかへりみ
為騰彌遠爾 里者放奴 益高爾山毛 越来奴 夏
すれどいやとほにさとハさかりぬますたかにやまもこえきぬなつ
草之念之奈要而志怒布良武妹之門将見靡 此山
くさのおもひしなえてしのぶらむいもがかどみむなびけこのやま
紀にあふみの海を阿布弥能弥とあれバうみのうと略き訓べし、角の
浦ハ和名抄石見國那賀郡都農とあり、浦まハ浦のめぐりをいふ、浦ハ裏
よく納江角の浦にハ古へよき湊なかりしなるべし、されどそのれと思
てなけどもと訓ハ俗く、人こそ見らめハ人ハさるとも見めの略、潟なしとハ海に
ハ瀬の満干のもうらねバ志ほ干潟のなきを、或本の礒ハ吾もとるハとる
べからず、よしゑやしハよしやといふにて、ゑとしハ助辞く、この浦も潟も

とよしや、我ハ恋る妹をといへるまでにて、次の句をと続く
依度し妹といふよく知らさるを、いさなとりハ枕詞、此海辺にいへるをいふ
十句目ハ其海のさまをいひて、妹がすむをいはん序として、和名抄に石見
石見国那賀郡の海辺に渡津（ワタヅ）村といへるなるべし、されバわたづ
のと四三の句も或本のに柔田津とあるハ、和多豆をおぼつかなくよみ誤れ
るよりて出来るなるべしといへり、あらそハあらいそを縮めいふなり、
香青のかハ発語、集中か青き髪といふが如し、玉もおきつもの句ど
朝なるを詞のあやにきぬいへり、息ハ借字にて沖也、船をすること
玉藻ハ朝夕の風こそよせめ浪こそ来寄れとへ、羽振ハ風浪の来ることを鳥の羽振
にたとへ、巻四風を痛み甚振（イタブル）浪の、巻十八に羽振（ハブキ）鶴ハ鳴とて、古事記
為釣乍打羽擧（ハブキ）来人、また天日矛の持来し宝に振浪（ナミフル）比礼、振風（カゼフル）
比礼などいふも有て、浪のむかへハ浪をおこすといへる、巻十五君が牟多（ムタ）

ゆきしものとて、船子多路共のことく、まてありこの成の如く、よるとありしも
そハ玉藻のなびくなびきにわが寝し妹をといへる、或本のそよしさかしハ誤れる
詞、露霜の枕詞、おきてしくればとハ、妹を残置てくる也、下ハ皆陸路の
さまにて、里ハさかりぬハ遠ざかるといふに同じ、すべて行道のさまをいふ事
に別と越し、其情あるも、益高に山も越来ぬ、益ハいやといふ事にて
の下に、こゝちよく妹ハ益（イヤ）年さかる、巻七さかりゆく益（イヤ）河の
ごとく、巻十二にもあれバこゝにもいへる益（イヤ）の益まさるなり、いやしく
なるに此益高にハやゝふくてまかれども、いやしく訓てかへるべし
夏草の枕詞、おもひしなえて、おもひしなへハなよよかに
しなぶハ萎や、しなえのぶと同じく、しなえなびけ此山ハ、巻十三靡け
と人ハふみて、かく依れし人ハ衛けども、山のおきて見ぬのらし
いふに同じきこと、ゆかるものを見ることくねがふなりとあるも、巻十二あさ

山持ことごとくわたりよりハなびきもされこそ妹があたりもみむとハいふなりとぞ

なり

反歌

石見乃也。高角山之。木際従我振袖乎。妹見都良武香

いはみのや。たかつのやまの。このまより。わがふるそでを。いもみつらむか

この歌ハ石見国より京へのぼり給ふとき。妹にわかれ給ひしこと。その高角山の木の間より

国のさかひを隔てゝ。妹見つらむといふにて。道すがらかへりみしこと

振袖を。妹ハ高角山より見つらんと。送りてつらむといふこと

小竹之葉者。三山毛清爾。亂友。吾者妹思。別来禮婆

さゝのはハ。みやまもさやに。さわげども。われハいもおもふ。わかれきぬれば

さやぐハ神武紀聞喧擾之響をさやげりとよめり。小篠の風に

鳴る音をいへり。乱どもさやげども同じ。巻十二松浦船乱穿江の

乱とさやぐとも同じ。越る山道のかしましきにも紛れず。

妹ハおもひし妹をおもふこと。巻廿佐左賀波乃さやぐ霜夜と

あれバ知るべきことのはハいとよし

或本反歌

石見爾有。高角山乃。木間従文。吾袂振乎。妹見監鴨

角鄣經。石見之海乃。言佐敝久。辛乃埼有。伊久里爾曽。

つぬさはふいはみのうみのことさへぐからのさきなるいくりにぞ。

深海松生流。荒礒爾曽。玉藻者生流。　玉藻成。靡寐之

ふかみるおふる。ありそにぞ。たまもハおふる。たまもなす。なびきねし

兒乎。深海松乃。深目手思騰。左宿夜者。幾毛不有。　延

こを。ふかみるの。ふかめておもへど。さぬるよハ。いくらもあらず。はふ

都多乃。別之来者。肝向。心乎痛。念乍。顧為騰。

このわかれはさしむまこころをいたみおもひつかへるところなれど。
大舟之。渡乃山之。黄葉乃。散之亂。爾。妹袖。清
おほぶねのわたりのやまのもみぢばのちりのまがひにいもがそでさや
爾毛不見。嬬隠有。屋上乃（一云室上山）山乃。自雲間。渡相月乃。雖
かにもみえず。つまごもるやかみのやまのくもまよりわたらふつきの。をし
惜。隠比来者。天傳。入日刺奴禮。大夫跡。念有
けどもかくろひくれば。あまつたふいりひさしぬれますらをとおもへる
吾毛。敷妙乃。衣。袖者。通而沾奴
われもしきたへのころものそではとほりてぬれぬ

つぬさはふ、いはといはへく枕詞、いはゝし、磯神紀由羅のとのとまりの異字（イソシリ）
えいは、撰日本紀句離謂石也異助語也とみえて、深みるは宮内式の諸国
の貢物に深海松長海松の二ツあり、海底に生るを深みるといふ、

玉藻は靡くといはん料、深みるは深めてといはん料也。さねしのさ
は發語、たまつるの枕詞、おもしくれば、ねる夜はいくばくもあらで
おもひいへば、圍よく逢はし妹とかや依羅娘子なからぬすれわく
ぐし、あつさのよはへといふ人麿らせる枕詞也、射翁考にかう
きれるを、大舟の枕詞、渡の山は府よりと東八里の所にあて云、
おのがひにまく、おほくまぎれに妹かかの袖のさや、かに
みえぬ、つまごもる枕詞、屋上の山も渡の山と同じ所の所く
いへり、さく府を立ちて此山遠ざかりぬ所に高角ありくにある
なるべし、かくしも月はかくろふ月とのみ、妹が家あたりの山に隠る
まじきを、月の雲隠るにかへていへるにて、此月はよの
なかをにあつかて、屋上の山のと切くにに隠れまれば、といふへつべく
なるべし、あまつたふ枕詞、入日さしぬれは、ぬれぞのたとの比喩也

おもしろかるべし第二の句をひまもなく。然この枕詞、よるハ妻
あとりふ詞也、まろねしてをと思ひわびてなくなくもて下まかれ
衣の袖まくら涙にぬれてほすしとぞ

反歌二首

青駒之足掻乎速雲居曽妹之當乎過而来計類 一云當者隠来計留

あをごまのあがきをはやみくもゐにぞいものあたりをすぎてきにける

あがきハあしかくさまなり、遊めバ志らふ、巻三赤駒のあがき
またハ雲ゐまで隠れ行んを袖まてらぎせし也、解注云ても青ハ赤
の誤なるらん

秋山爾落黄葉須臾者勿散乱曽妹之當将見 一云知里勿乱曽

あきやまにおつるもみぢばしばらくはなちりみだれそいものあたりみん

ちりみだるなれどもかくいて集本のまゝと志るべく

志ましくハといふハ伝写のあやまりか

或本歌一首并短歌

石見之海津乃浦乎無美 無美ハ津能乃浦回乎の能と回を脱し、無美ハ後く入らしき也 浦無跡人社見良目滷無跡人社見良目吉咲八師浦者雖無縦恵夜思滷者雖無勇魚取海邊乎指而柔田津乃荒礒之上爾蚊青生玉藻息都藻明来者浪己曽来依夕去者風己曽来依浪之共彼依此依玉藻成靡吾宿之敷妙之妹之手本乎露霜乃置而之来者此道之八十隈毎萬段顧雖為彌遠爾里放来奴益高爾山毛越来奴早敷屋師吾嬬乃兒我夏草乃思志萎而将嘆角里将見靡此山

反歌

石見之海打歌山乃木際従吾振袖乎妹将見香

この和歌山といへるのやまとかなつくれどいとよし、和歌の下角の
字の脱たるなるべし、さらば和歌はこのかたちまくいふのやうと
訓べきこと、初る石見の浦をさしも誤れることあり、ちなみに紀のこゝに或本
はとられぬるなりとぞ

右歌體雖同句句相替因此重載

柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與人麻呂相別歌一首

これは人麻呂従よりのぼりて又石見へ下る時、京にとゞまる妻のよめる也

今年ヲ年ニ誤

勿念跡君者雖言相時何時跡知而加吾不戀有年

なおもひそときみはいへどもあはんときいつとしりてかわがこひざらん

有年は有年の誤れるなるべし

挽歌　柩をひくときの名目を借るのとまれ後の集の哀傷也

後崗本宮御宇天皇代　天豊財重日足姫天皇　後に齊明と申せり

有間(アリマ)皇子自傷結松枝歌二首　孝徳紀阿倍倉梯麻呂女小
足媛有馬皇子を生たまふ、齊明天皇四年十月天皇紀伊の牟
漏の湯へ幸ありし時此皇子叛逆あらはれて紀伊へめしよせらる、さ
国の岩代の濱にて御食(ミケシ)をまゐる時、松の枝を結びて若此度幸く
あらば又還らんと契約して詠るなり、さて藤代にて命うし
なひまゐらせつ、歌の上御の字を脱せり

磐白乃濱松之枝乎引結真幸有者亦還見武

いはしろのはままつがえをひきむすびまさきくあらばまたかへりみむ

磐白既出、幸くも有ば又還りて見んの意なり

家有者笥尓盛飯乎草枕旅尓之有者椎之葉尓盛

いへにあればけにもるいひをくさまくらたびにしあればしひのはにもる

和名抄笥和名計盛食器也、武烈紀　飯笥(イヒケ)ごとに、多摩該(タマケ)にも

伊比太信母理（イヒサヘモリ）、このまけハ九笥之、鎮魂祭式ニ飯笥一合ミヽ即盛

蘭笥なりといへども椎の葉を折なべて強飯を盛るすぐれハ旅ニ

てハさるさまなるあた旅の小枝を折敷てもりつらん、旅ハ葉のこよなう

ニ稀なくて苦しかるなれバかりそめニ柏と名ぐべきものと

長忌寸意吉麻呂（ナガノイミキオキマロ）見結松哀咽歌二首　ニ本二の字を脱せり、

意吉麻呂ハ文武天皇の御時の人なりし、辰あれど其の返でとかく

ここに載しつ、歌のさま作の字なすべし

磐代乃岸之松枝将結人者反而復将見鴨

いはしろのきしのまつがえむすびけむひとハかへりてまたみけむかも

皇子の結びの結枝をまつへ結びたんことなり

磐代乃野中爾立有結松情毛不解古所念

いはしろのゝなかにたてるむすびまつこゝろもとけずいにしへおもほゆ

結びていくちのあとぞいへ、此松結びれたまうをなくしむ此時はさてもありなるべし

未詳

山上臣憶良（ヤマノヘノオミオクラ）追和歌一首　此二字後人のさかしらか　憶良ハ意吉麻呂よりは後之、和ハこたふる

の字なるぞ、擬ふしけるなるべし

鳥翔成有我欲比管見良目杼母人社不知松者知良武

つばさなすありがよひつゝみらめども人こそしらね松はしるらむ

翔ハ翅の誤なるべし、成ハ如之、此字あまたハつばさなすかの如く即鳥のするが、あらまし

がよひハ在通之、集中に多し、皇子の魂魄のまさで飛鳥のかけらく天

かけて通ひくる給ふらんと、人ハ志るよしもあらねど松は知りてあらんとなり、履中紀

鳥往来（トリカヨフ）羽田（ハダ）之汝妹（ナニモ）ハも

右件歌等雖不挽柩之時所作唯擬歌意故以載于挽

歌類焉

挽柩の字ニ泥みて只ニ挽歌の字のミ心得ぬ人の為にかくいへるなり

宝ヲ今寳ニ誤

君ヲ今若ニ誤 元ニ依テ改

大寳元年辛丑幸于紀伊國時見結松歌一首 元柿本朝臣人麻呂歌集中出也

後将見跡君之結有磐代乃子松之宇禮乎又将見香聞

のちみむと きみがむすべる いはしろの こまつがうれを またもみむかも

うれハ末をいふ 皇子の御魂の又見まさむと思ふよしハ太の意なり 麻呂の頃の事と聞ゆるを後人のまよひ加へしにやあらむ

近江大津宮御宇天皇代 天命開別天皇 諡天智天皇

天皇聖躬不豫之時大后奉御歌一首

天皇ハ十年九月より不豫十二月崩ましぬ 大后ハ別に古人大兄皇子の御女倭姫王と申し奉りし 奉の下獻の字を脱せしか

天原振放見者大王乃御壽者長久天足有

あまのはら ふりさけみれば おほきみの みいのちハ ながく あまたらしたり

あまたらしたりと申せるハ推古紀に蘇我大臣の傳まで天の八十蔭いでましてみそらをみれば萬代にかくしもがもとよめるに同じ 天を御殿とし給ふ天つ御孫の命におはしませば御命もながく天と共にたらひ給ふと申す也 ほぎ奉る辞になるべし 此五の句の間ハむかしより定まれる事かくよみ来るなるべし

一書曰近江天皇聖體不豫御病急時大后奉獻御歌一首

此一書ハ天原の御歌に附たるにあらず 左の青旗の清き御ものハ天皇崩御まして後の殯羽なるべし 青旗乃と云者從の御事と並べ載るなるべし む歌を今本亂たるなるべし

青旗乃木旗能上乎賀欲布跡羽目爾者雖視直爾不相香裳

あをはたの こはたのうへを かよふとは めにはみれども ただにあはぬかも

素旗ハ白旗也、木旗の木ハ小の誤にて、ある本ハ同じ事ながら小の変字を書く
誤れるにや、是ハ大殯宮に立る白旗どものよしを今も御所の記にハ見えて
させ給へど、正しく書るなしと聞ゆ、まへにも云、白旗の事ハ孝徳紀
の葬制に、王以下小智以上帷帳に白布を用るよしあり、崇峻紀に三、大殿を
振さけられし白細布に錦をつけたり、同じ宮の舎人ハ雪穂の麻
衣きれバ、さらにまさしく喪葬令に太政大臣旗二百竿とあるをはじめてしるし、
且成務紀神功紀に、降人素幡をさして、棄てるをもて死につくよしあれバ
是らをもて合せ見るべし、但是ハ常陸風土記ありて、葬具儀赤旗
青旗交雑ことしもよしあるも

一天皇崩御之時倭大后御作歌一首　右にいへる如く此歌の意ハ青
旗の御墓のあたりをいふ、倭といへる御名も詠入給ふに

人者縦念息登母玉蘰影爾所見乍不所忘鴨

ひとハよしおもひやむとも、たまかづらかげにみえつゝわすらえぬかも
玉かづら枕詞也、玉ハ山の誤にて山かづら也、古事記にあり山の山かづらかげ
まかげてとあるかげハ蘿（ヒカゲ）を、山かづらといふ故に山かづらかげと
つゞけたり、けれバ山かづらハ影の枕詞なるよし書く論へ、新古にこえつ
ハ不知らんそて云

天皇崩時婦人作歌一首　姓氏未詳

空蟬師。神爾不勝者。離居而。朝嘆君。放居而。
うつせみしかみにたへねばはなれゐてあさなげくきみさかりゐて、
吾恋君。玉有者。手爾巻持而。衣有者。脱時毛
わがこふるきみたまならバてにまきもちてきぬならバぬぐときも
無。吾恋。君曾伎賊乃夜夢所見鶴
なくわがこひむきみぞきぞのよいめにみえつる

うつせみハ顕の身之、一ハ一セといひ入る詞と見るべし、神ならねば、神と
なるべく天かけり給へバこそ現の身ずして志たふひなるゝ據也して、離
きをるべし、既嘆ハ隻に見なれるあしきなれくゝ、さのまゝおもくろ、
さのうしもさりてとりずとも、むなしくバ訓ともくすおむと偲るのあれバ
かくいひ、さくむの衣なるバ身をもはなさじして思ひきらんやといふ之、
先三人ぞの志のきかこころむなくバくみまもりて居むでおくらまし、
きぞの夜ハ昨夜之、去年の使者もこよひやとよあるし、夢ハ集中一伴
美とよみ、伴ハ度る義、美ハ月かく、いねくねとえもといふことく思ふ
略して由めとりふ

天皇大殯之時歌二首 大殯ハ崩らまひく、山陵造る程假にをさき
めなきをいふ、沖依紀ハ殯豊浦宮為先火殯斂此謂褒那之阿
餓利 このおほてのちもちかり殯に奉れるて

如是有刀豫知勢婆大御舩泊之登萬里人標結麻思乎
からむをかねてしらせバおほみふね泊てしとまりにしめゆはましを
額田王 官本等拾穂本に此三字なし、その行に停泊のつまり時しらす還
りまして来くとどめならべ、ゐましのをとこ、此その舩に依る之、古る江泥布
刀王命以尻久米縄控度其御後白言従此以内不得還入とある同し
将之、乃ハ刀の謡之

八隅知之吾期大王乃大御舩待可将戀四賀乃辛崎
やすみしゝあがおほきみのおほみふねまちかこふらむしがのからさき
舎人吉年 官本等拾穂本に此四字なく、吾をあそといふもかなし、
しがの辛崎が大津舩を待らんといふ之

大后御歌一首
鯨魚取淡海乃海乎奥放而榜来舩邊附而榜

いさなとり あふみのうみを おきさけて こぎくるふね へつきて こぎ
来舩 奥津加伊 痛勿波祢曽 邊津加伊 痛莫波祢曽 若草
くるふね おきつのかい いたくなはねそ へつのかい いたくなはねそ わかくさ
乃 嬬之 念鳥立
の つまの おもふとりたつ

いさなとりは枕詞、おきさけては沖を遠ざかりて也、邊つきては汀に添ひて也、
かいは櫂也、古へかいとかちを一物とせり、集中真梶繁貫とし、赤加
伊之自奴伎とも有、おきつのかいへつのかいは、沖こぐかぢ、汀こぐかぢなるを、
わかくさの枕詞、このつまは天皇をさしたれば、夫とかくべきを、古へは言を
かよはして字にかゝはらぬ例也、此歌は下の日並知皇子尊の殯の時、嶋の
宮池の上なる放鳥をよめる如く放ち飼ひし鳥の崩ましてのち
湖に放ちあるをみて思ひてよみ給へるなるべし 宮もち云、嬬之命之

とまをん、命之二字脱せるにやといへり、さもあるべし

石川夫人歌一首

神樂浪乃 大山守者 為誰可 山爾標結 君毛不有國
さゝなみの おほやまもりは たがためか やまにしめゆふ きみもあらなくに
さゝなみの枕詞、大山は深山也、大宮のある山なれば、山もりをおきたれ
ど君あはんをもらしめぬをなげくなり、有は在の誤ならん、この

從山科御陵退散之時額田王作歌一首 諸陵式山科陵云
天智天皇山城國宇治郡にありと見え、紀に十年十二月乙丑天皇崩
近江宮癸酉殯新宮とありゆきてし託なく天武天皇二年になるまで
此陵は造らせ給はで、諸陵つのへも此時なるべし
八隅知之 和期大王之 恐也 御陵 奉仕流 山科乃 鏡
やすみしゝ わごおほきみの かしこきや みはかつかふる やましなの かゞみの

山爾夜者毛夜之盡 晝者母日之盡 哭耳呼

やまにはもよるはもよのあくるきはみ、ひるはもひのくるるまで、ねのみをし

泣乍在而哉 百磯城乃大宮人者去 別南

なきつつありてや、ももしきのおほみやびとは、ゆきわかれなむ

かしこきやの下はよるなき夜は巻廿可之故役也あめのみかどを、あきに

御陵の喪葬令義解に、帝王墳墓如山如陵故謂之山陵とあれば

はみさぎとそのみいつくしき、古くはみさきのとのゐとするべし、山科の陵の山

山科之、近江豊前まても同名の山有、あるはもこよし、是曰、晝渡日乃

久流留麻足ハ夜者夜之明流寸食とあるにつなかるにてこれおほけむと古言

まうさくはおもふ言をかならずいふと古言のまにまに、聞えるをも集中にもおほかりし、聞しあの状いは、

大宮人ハまえし、葬よりて一周の忌ハ近習の臣よりも舎人まで御陵

侍宿まもる事しるべきゆゑ

明日香清御原宮御宇天皇代 天渟中原瀛真人天皇 [作者未詳]

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首 皇女ハ天武の女也、七年

四月宮中にしてにはかに薨しぬ

三諸之神之神須疑已具耳矣自得見監乍共不寐夜叙多

みもろのかみのかみすぎ いめにのみみえつつともに いねぬよぞおほき

已の字より下十字とにかくによみ得ることかなはず、さればあれど

おぼつかなし、具一本目、矣一本笑に作る、已ハ已の誤にて、已乃寐所見監乍ならむ

ゆめにのみみえつつといふなるべし、いめのみにみえつつもとなし、いねぬよぞおほきとなるべきか

考へし

神山之山邊真蘇木綿短木綿如此耳故爾長等思伎

かみやまのやまべまそゆふ みじかゆふ かくのみからに ながくとおもひき

三諸も神山も神岳とも三輪ともいはれる、このかみやまは集中に見ゆることの

ときこゆるに三諸と云ハ三輪山ことゆゑうたがひなし、神なびの三室、又神なみ備山ともいへるハ神なるの神奈也、されバここハ二つともに三輪ならされど此神山とも本却て、みもろやまを訓人おほかりし、木綿ハ穀（カヂ）の皮也、麻ハ苧麻を〔？〕とへるを説しかさらく、木綿麻らぐ割て肥る物を苧（ツ）といふて、それをゆふとなすもおもとなどいふ也、式よ、木綿を麻とし、麻を紡しめて、紀本綿とす木綿ハもとより短きものなれバ、短きを没切く、此清命の短きをさとらしめたまへるかへ、かくのみならまのからハ字のやくゆゑみて同じくて、人妻故二三みとよまる故と同じき也、かくのごとく短きものをもちくとおもひしよと

歎給ふ也、歎五句しきよし加久乃未可良尓有るへし、いはゞんのまでたゞ

とへなき

山振之立儀足山清水酌尓雖行道之白鳴

やまぶきのたちよそひたるやましみづくみにゆかんどみちのしらなく

和名抄款冬一名虎鬚、和名夜末不々木、一云夜末布木、萬葉集云山吹花とあり、款冬とせしハ違へり、字の何にもせよ、やまぶき也、山吹の花ハ谷中に咲るよしよみて、さて山吹ハ清き山の岩水のほとりなどに咲るものなれバ、山のしみづと詞をつゞけ給へり、黄泉をせし也、山吹ハ皇女のことし此花のやくらまやぎおえまてらんと思へども、尋ゆかんそのしられねバかひなしと、をさなくよみてまします也、儀ハ儀なりの語をもしたしたまへるにしるべし、黄泉二字を和名に布多奈命とよしおもとひくとおもみ

天皇崩之時大后御作歌一首

宮にましませ崩給ひ、此大后後に持統天皇と申奉る

朱鳥元年九月九日清御原

八隅知之我大王之暮去者召賜良之明来者問

やすみしゝわがおほきみのゆふされバめしたまふらしあけくれバとひ

賜良之。神岳乃山之黄葉乎。今日毛鴨問給麻思。
たまはらし。かみをかの。やまのもみぢを。けふもかも。とひたまはまし。
明日毛鴨召賜萬旨。其山乎。振放見乍。暮去者。
あすもかも。めしたまはまし。そのやまを。ふりさけみつゝ。ゆふされバ。
綾哀。明来者。裏佐備晩。荒妙乃。衣之袖者。
あやにかなしみ。あけくれバ。うらさびくらし。あらたへの。ころものそでハ。
乾時文無
ひるときもなし

召賜の召ハ借字にて見たまふを申す。問賜ハとひのたまふをと云ふ。此二つの
言葉ハ大かたいづれとも見え。其サ大君のつぎてしめして見てしらすものなるべし
まだとほれのこしなる事。此言葉と同じく通ふの詞をいへり。神岳ハ飛
鳥の神南備山のなり。雄略天皇の御時。此山の名を改めて雷岳と
改せ給ひし記あるを。古へ雷をかみといひしなれバ。雷岳ともて
もかみをかと訓べし。名づけて飛鳥ハよしとハ杉をしげるが為なる
をもしのもとへ。こを山とふりさけみつゝ。大后の御いにしへ見ものとて給ひ
つゝ。あやなしのあやハ。あやなしいふ同じく。何のゆゑもなく切に思ひ歎く
詞く。古事記に阿夜訶志古泥(アヤニナコヒキコ)志。このあやかし
なるし。うらさびハ心さびさすなど。あらたへのこゝハあらたへハ廣人の服
なく。今集解に大御喪にハ細布を奉るよしあれど。この細布を大
后の御喪なれど人の着るあらたへのやうにおもひて。かくのたまふなるべし
一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首　此太上ハ持統天
皇にあれまして。天武天皇崩ませし後。四年に即位。十一年八月御位を
文武天皇に譲りたまひて後。太上と申奉る。文武崩ませる時太上にて
おはしましけるなり

燃火物。取而褁而。福路庭入。澄不言八面。智男雲

もゆるひもとりてつゝみてふくろにはいるといはずやも、ちといへるくに
智一本知に作るもあり、といはずやも、ちとのこゝろもしらあれどよみす、
篇てるをよみくれハ、澄ハ登の仮、智ハ知日二字ちならんか、志つかハいるといへ
ずやしおもしいきをくもと訓べし、是ハ後世火をくひ火を嘘きなどす
るなれバ、ちら御時ありし役小角が類の火を袋に包みなどせしちらし莊
き術ありけるのまゝらむ、さらくさる怪きことバをよみ玉へる、崩給ひ
し君に逢なまん術を知といへぬがかなしさにや、類聚に云、第十二
に面知君が見えぬばかりによみたれバ、智ハ知の仮なるべし、いると
いはずやおもしるなくもとよまむか、又なればあつくもまへ法面との
見えなまぬをおもひぬるくといへり、智を知に作る本もあれバ、
面知しせむかたも然るべく、おもはるれど、強態なりけて考べし

齋ヲ今齊ニ誤

向南山。陣雲之。青雲之。星離去。月牟離而

きたやまにたなびくくものあをくものほしはなれゆきつきもはなれて
青雲ハ白雲にて、さて雲の星をさるゝしかれバ、牟ハ毛の仮なるべし、是ハ
后をも臣をもおきてかくれ給へるをまをせるを、月星にたとへて、よそに坐給
ひしを悲ミ給へるなれバ、雲をもて、あらハさず、星ハ天にある星のごとく
よそとなるをハいへるなり、二つの離ハさのまゝ訓て、月も星もつきも行と云、
ほどなれバ星月も次第にうつりゆくを見給ひて、崩給ひし月日の行く遠く隔
行を悲しく思ほしたへるにやおもふべし。

天皇崩之後八年九月九日奉為御齋會之夜夢裏習賜
御歌一首　習ハ誦の仮か、此次に藤原宮御宇と標して、右同天皇崩
ませる朱鳥元年十一月の哥を載て、次に同三年の哥有をこゝに
同八年の哥載べきにあらず、是持統天皇の御哥なるを、後世にも御製

まなべしかくいはずしるさり考ふいへども、此御齋會のよし持統紀二年
二月の條に、自今以後毎取國忌日要須齋也とあり

明日香能清御原乃宮爾。天下。所知食之八隅
あすかのきよみはらのみやにあめのしたしろしめしゝやすみ
知之吾大王。高照。日之皇子何方爾。所念食可。神
しゝわがおほきみたかてらすひのみこいかさまにおもほしめせかかん
風乃伊勢能國者奥津藻毛靡足波爾塩氣能味香乎禮流
かぜのいせのくにはおきつもゝなびきしなみにしほけのみかをれる
國爾味凝。文爾。乏寸高照。日之御子
くにゝうまごりあやにともしきたかてらすひのみこ

靡足波とはなびきしとある波、足をかなる用ひ、又ハ之の誤
ならむ、潮の満る時くゆるをかをるといふ、神代紀に我所生之

國唯有朝霧而薫満之哉、又神樂歌にいせじまやあまのとめら
うつくほのけたけく、たくほのけいそいそかをるかをりもあふなれけく、
又巻九に、塩氣のみかをれる國にとあれど、おもしろからず、合せ考べし、
皆熟考ふるに、かのみの條にも委しく、味ごり枕詞、此意にて心得べし、
後にいへど、こは吉野より伊勢の國へ幸有しく、幸者におませ
しますを、かくさきおもふ身にて、荒海の音をもたずせしつゞ
られかぞけなさくよしこの

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇　謂持統天皇

大津皇子薨之後大來皇女從伊勢齋宮上京之時御作
歌二首　朱鳥元年十一月之

神風之伊勢能國爾母有益乎奈何可來計武君毛不有國
かんかぜのいせのくにゝもあらましをなにしかきけむきみもあらなくに

神かぜの枕詞、其ハ大伯皇女をさし給へるを

欲見吾為君毛不有爾奈何可来計武馬疲爾

みまくほりわがするきみもあらなくになにしかきけむうまつかるゝに

見まくほりし給ふきみもましまさぬを、何しにかくうまつからしつゝ来つらむ、ひとつの御歎き、なりけり

みづからの御なげきを述給ふ也

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御

作歌二首　二上山ハ葛下郡にあり

宇都曾見乃人爾有吾哉従明日者二上山乎弟世登吾将

見

うつそみのひとなるわれやあすよりはふたかみやまをいもせとわがみむ

今現在まします我君、此山を兄弟と見てやあらむぞと歎き給ふ也

巻七、本路まそ妹山を三猪上の二上山も妹とぞ背とはいはれ、是ハ

かく妹と兄とし給ふハ、巻三ニうつせみの世のことなれバよそに見し山をや今ハ

よそにし見むか山をいもせとおもひて、かくハ男女の兄弟をいもせといひし也

礒之於爾生流馬酔木乎手折目杼令視倍吉君之在常不

言爾

いそのうへにおふるあしびをたをらめどみすべききみがありといはなくに

古へハなべて石をいそともいへバ、此二上山の石上にある生ふるあしびと

見つべし、ほとりのすとへるハわろし、巻十かはづなくよしのゝ河の瀧の上の

馬酔之花ぞしぬぶと、今本つゝじと訓、六帖にも此歌をあせみの

花としのぎれバ、古くハあせみとよみしならん、ふるくしてもあせし

と訓べけれど、巻七に安志妣成、巻廿に安之婢とよめるを思ふべく、ここハ

あしびと訓て、六帖にはあせみとよみしハ、古への道へバや後にハ是のごとく

云しなるべし、さてあせみハ木瓜の花なるべし、三月のころ咲花に

悲しと詠く咲くものなく、集中に多し、冠辭考あしびなすの條に委し、からぶまにる時なといへるハこのなるべくきこゆれど、このみ歌の前なる時を云も移葬の日に皇女も墓所へまかりて、此字こゝろへてよみたまへるなり、是へハかゝる時皇子皇女あしたる人なきなる事紀に見ゆまうべうてし、左注ハ後人のちらざかなるべし

右一首今案不似移葬之歌盖疑從伊勢神宮還京之時路上見花盛傷哀咽作此歌乎

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

並の下知の字あるべし、紀に此の字を脱せるとも、目録また并歌に稱ふ、此皇子ハ朱鳥三年四月薨ましゝ事紀に見ゆ、草壁皇子尊とも申せり、天皇の外ハ殯宮をハせられねど、此葬の後一周まで墓仕まつる間をハ殯と云しるし也、又本後紀左の左注より此端詞を書つけしなり

天地之。初時之。久堅之。天河原爾。八百萬。
あめつちの。はじめのときし。ひさかたの。あまのかはらに。やほよろづ。
千萬神之。神集。集座而。神分。分之時爾。
ちよろづのかみの。かんつどひ。つどひいまして。かんはかり。はかりしときに。
天照。日女之命。一云指上日女之命 天乎波所知食登。葦原乃。
あまてらす。ひるめのみことは。あめをばしろしめすと。あしはらの。
水穂之國乎。天地之。依相之極。所知行。神之
みづほのくにを。あめつちの。よりあひのきはみ。しろしめす。かみの
命等。天雲之。八重搔別而。一云天雲之八重雲別而 神下座奉之。
みことと。あまぐもの。やへかきわけて。かんくだし。いませまつりし。

久かたの枕詞、紀に天の安河原とあるを安を略るなり、八百萬千萬神のことハ天孫を水穂の國へ降しまつらせんとの神議なればハ天照

の句四句を隔て葦原といひかへられて、此四句のうへハ天の
神はかりにはかりておのすめらみことを、ことを定給ふ句となりて
とく前段をいひて、天てらす日女の命ハ、一かたのかくるを用ゐて
天をハ既に日女の命のしろしめすにより、天孫ハ豊葦原の國を
地と久しく知ろしめすのよし謂しなきをすること、水穂のくにハ借
字にして稚(ミヅ)にしき穂也、天地のよりあひの極ミハ既に地の開られ
しより對と又依合ん限までと也、神の命とハ、即天孫彦
火瓊瓊杵命をさして、天雲のやへの詞ハ、神代紀祝詞などに同じ
古ころ也、神下ましませまつりし宮ハ書紀十五ひとくだり
きこを伊麻勢豆しよりて、ましませまつりしと訓
べし、いませハ今座のことと也、よりにてあるく一段をなしく
これまでを歌の序なるべし

高照。日之皇子波。飛鳥之浄之宮尓。神随。太布
たかひかるひのみこハあすかのきよみのみやにかむながらふとしき
座而。天皇之。敷座。國等。天原。石門乎開。
ましてすめろぎのしきますくにとあまのはらいはとをひらき
神上。上座奴。一云、神登座尓之可婆
かむあがりあがりいましぬ

たかひかるとハ、此日の皇子ハ日並知皇子をさすゆゑ此句をかく称して
天原ことといひかへかゝる、此國土ハ天皇の知ろし國也として、日並知そるハ
天へよりて称ていひあらわす、此御子皇子ハ持統天皇の御子、淨御原天皇
在りしたもとを二段に、開ハ閉の借字にて、なをしく例べし、皆て三世の國
の鏡の山に、石戸(イハト)立(タテ)隠れますとし、書紀之と定め持統之、一本の非の
ぼりいましませしのハ句つきよりつらづいおほよと見るべし

吾王。皇子之命乃。天下。所知食世者。春花之。
わがおほきみみこのみことのあめのしたしろしめせば。はるはなの。
貴在等。望月乃。滿波之計武跡。天下。一云食国 四方之人之。
たふとからんともちづきのたゝはしけむとあめのした（一云をすくに）よものひとの。
大船之思憑而 天水。仰而 待爾。何方爾。
おほぶねのおもひたのみてあまつみづあふぎてまつに。いかさまに。
御念食可。由縁母無。真弓乃崗爾宮柱。太布座。
おもほしめせかつれもなきまゆみのをかにみやばしらふとしきいまし。
御在香乎。高知座而。明言爾。御言不御問。日月之。
みあらかをたかしりましてあさごとにみこととはさずつきひの。
數多成塗。其故。皇子之宮人行方不知毛一云刺竹之皇子宮人歸邊不知爾為
まねくなりぬるそこゆゑにみこのみやびとゆくへしらずも

皇子の命といへるは日並知皇子の御事なり、春花の貴から
むをいふ、めでたくほむる詞也、貴の字義にかなへるなる
られよりき宮ちはよるべし、望月の如く、又十五夜もちづきの多田
波思家武とあるは、よろしく契沖説によるべし、満るは満る意
て、御思ひのたくらひなしけりとも、その下或本の事をしぐれいづれ
まされるべし、食国は志ろしめす国なり、大船の枕詞、天つ水は雨
さる時に雨を待ごとくいへり、由縁もなきは、吉三都礼毛奈吉さ
みの山べは、大和三津礼毛無城上宮にいへり、これもよるべくこともつぎ
なきをもいはんとてなり、これ別ゆゑもなくといふことなり、さて此式に
高市郡真弓丘陵とあり、宮柱云々は上にいへり、陵を御殿と
あるなど、常の御殿にたとへていへり、あさごとに、言は借字に
て、日毎にといふことなり、みこととはさずで、古へものいふことをいふ、かの

いそぬをこゝろゆくといへり、數多成塗、まねくなりゆくと河とけるを一は
既といへり、みこの宮人ことく、一云さゝらけのみこの宮人ゆくへしらずあれど、
數多なりぬるといふかたも、そこゆゑつけるまゝさればハ一本を
とるべし、こゝハ御墓づくりの日数經て退散といへり、さゝらくハ下の高
市の皇子尊の殯の時、人麻呂のよめるなどをとられし、春宮舎人をそ
此時よよめりしなるべし、それならばこの宮人ハ大舎人のことゝりとゝ

反歌二首

久堅乃天見如久仰見之皇子乃御門之荒巻惜毛

ひさかたのあめみるごとくあふぎみしみこのみかどのあれまくをしも

これハ島の宮の御門の次の舎人ホのあらずて此歌つのることもあらん、
下の高市皇子尊の殯の時人麻呂の歌門の人とよみしと故あるに、人
麻呂民舎人まくて宮する後つとめせしなるべし、あれまくらんハ

尊ヲ今人貴ニ誤
反歌ヲ倒置

あれんが惜きとや

茜刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良久惜毛

あかねさすひはてらせれどぬばたまのよわたるつきのかくらくをしも

あかねさす枕詞、是ハ皇子の後事を譬へたまひ上の日ハてらせれ
どいよハ月の隱るゝを歎くと述べたる也、かくらくハかくるゝと
いふ心、此日とを皇子をさしたるよやとりて給へあれど、天武天皇崩
ましてこ年に此みこ薨たまひしは明らく年大后位に即給へれバ、
此時も皇を恐しまうてたるなあけるをゆゑればよのつゝ故

或本云以件歌為後皇子尊殯宮之時反歌也　後皇子ハ

高市皇子尊をまうす時也て人の言をとりたるなり

或本歌一首

島宮勾乃池之放鳥人目爾戀而池爾不潜

しまのみやまがりのいけのはなちどりひとめをこひていけにかづかず

是ハ右の反哥ニハあらず、次の舎人どもの中ニ入べきを、こゝに入しハ誤りか、勾ハ高市郡ニて、安閑天皇の皇居のありし所なるを、日並知皇子の宮所ニひき給へるなるべし、そこなる池を勾の池といひしニ、其中ニハ鳩の嶋の島ともよみあれバ、放鳥のすみかなりしとハいへり、天武紀十年秋九月周芳国貢赤亀乃放島宮池、されバこれハ鳥の雛などもおほく放ち飼ひしと云、こゝなるのなれし人めをなつかしみ、皇子かくれ給ひて、のちハかなしくて、底ハかづき入ることをせざるといへる

皇子尊宮舎人等慟傷作歌二十三首　傷目謂ニ慟ニ作る、

職員令春宮大舎人六百人とあり、この薨後島宮の外重を守りし、佐太岡の御喪舎ニ侍宿ありしほどに、こゝにてのよめるなるべし、のちハかれらのぞみありや

池上今倒置

益ヲ今蓋ニ誤

高光我日皇子乃萬代爾國所知麻之島宮婆毛

たかひかるわがひのみこのよろづよにくにしらさましゝまのみやはも

日の皇子ハ日並知皇子なるを申、くにしらさましハ御宇

島宮池上有放鳥荒備勿行君不座十方

しまのみやいけのうへなるはなちどりあらびなゆきそきみまさずとも

上池とあるハ誤也、一本池上とあるをよしとして、是ハ勾の池なり、鳥のあそびなれしハ、おのづからなるべし、あらびなゆきそハ放ち飼ハれたるがなるを思ひやるべし、主人を離れてちりゆくをいふなりといへる

高光吾日皇子乃伊座世者島御門者不荒有益乎

たかひかるわがひのみこのいましせバしまのみかどハあれざらましを

此うたハ舎人の宮仕なれバなるといへり、益をと蓋ニ誤れり

外爾見之檀乃岡毛君座者常都御門跡侍宿為鴨

よそにみしまゆみのをかもきみませばとこつみかどゝとのゐするかも

まゆみの岡ハよそに見し所なりしをよりハつねの御殿とさだめてとのゐすといへり

夢爾谷不見在之物乎欝悒宮出毛為鹿作日之隅回乎

いめにだにみざりしものをおほゝしくみやでもするかさひのくまわを

作日一本佐田とあり、宮出ハ御門を出入することをいふ、作ハ佐ノ誤なるべし、一

檜隈之檜隈の宮の内、ちかき所の佐太の岡ハつゞきたる所ときこゆれど、一

本佐田とあるハしかるべく佐田の方を用べきなり、いかゞあらんかし

此佐田の岡の御陵の御前を出入することを思ひてハおぼゆる

宮なるを佐田とよむ時ハ隈回ハ道のくまわなどよめるを用ふべし

天地與共将終登念乍奉仕之情違奴

あめつちとゝもにをへんとおもひつゝつかへまつりしこゝろたがひぬ

皇子と天地とともに久しからんと思ひしと也

朝日氏流佐太乃岡邊爾群居乍吾等哭涙息時毛無

あさひてるさだのをかべにむれゐつゝわがなくなみだやむときもなし

朝日夕日をもてほむる山宮殿などの事をいふハ集中まゝあり、古き

例あれども只ニ其所の事をいふのミ、此陵の傍なる所に宮ハ

佐太の岡も宮所にやありつらんなるべし

御立為之島乎見時庭多泉流涙止曽金鶴

みたゝしゝしまをみるときにはたづみながるゝなみだとめぞかねつる

皇子の勾池を御覧じたまひし島をおもひ出て涙を流し給ひしか、此池島

にはたづみハ雨のふりて来りながるゝをいへれど、こゝによめるハ雨のふりたまりて

流るゝなるべし、にはたづみ枕詞

橘之島宮爾者不飽鴨佐田乃岡邊爾侍宿為爾往

たちばなのしまのみやにはあかねかもさだのをかべにとのゐしにゆく

皇子のおはしましゝ時のまゝにあれ、このおとゞにとのゐしつかへしとき
なりいでたり、あはれかとよみて、あそばゞものかとのたまへる給へ

御立為之島乎母家跡住鳥毛荒備勿行年替左右

みたゝしゝしまをもいへとすむとりもあらびなゆきそとしかはるまで

是も御苑の池に放ちてめるが、人うとくならずして、年とゞまれとよめりとぞ

御立為之島之荒磯乎今見者不生有之草生尓来鴨

みたゝしゝしまのあらいそをいまみればおひざりしくさおひにけるかも

池は荒ざりしか、荒磯のさま作られしをいふなるべし

鳥塒立飼之雁乃兒栖立去者檀崗尓飛反来年

とぐらたてかひしかりのこすだちなばまゆみのをかにとびかへりこね

とぐらハ鳥座にて、おき給へる處也、このかりハかる鴨の事也、夏鴨

をいふなるべし、後の物語にふかもかもといへるも是にや

若くし、筆とゞまらば皇子の御陵へまゐれとぞ、塒ハ栖の誤り

吾御門千代常登婆尓将榮等念而有之吾志悲毛

わがみかどちよとこしへにさかえむとおもひてありしわれしかなしも

とこしへハとこしなへといふに同じく、とこなへなる事を云之

東乃多藝能御門尓雖伺侍昨日毛今日毛召言毛無

ひむがしのたぎのみかどにさもらへどきのふもけふもめすこともなし

池に瀧ある所の御門をかくいふなるべし

水傳礒乃浦回乃石乍自木丘開道乎又将見鴨

みづつたふいそのうらまのいはつゝじもくさくみちをまたもみなむかも

出づる瀧を、上の池の邊の磯のさまを、瀧まれ流まむ、いそつゝじ 和名

抄羊躑躅和名以波豆ゝ之とあり、木の茂りたるをいへど、本立さ

く八紀に舊の字をもく訓 字注 草木の繁茂するをいふ

又人あひくもハ今よりハ此うちまゐるまじくれバよろづよろこび給ふさまと

一日者千遍参入之東乃大寸御門乎入不勝鴨

ひとひにはちたびまゐりしひむがしのおほきみかどをいりかてぬかも

今かたごのみかど御門すハ御宮なるれバたちのちよあむよハ乃のなまそ

参りて入がてぬハ入ありえがてといふてがてるかといふ事あり

所由無佐太乃岡邊爾反居者島御橋爾誰加住舞無

つれもなきさだのをかべにかへりゐばしまのみはしにたれかすまはむ

つれなきハ縁よいへり。かへりゐバ舎人の分番交替してゐるをいふ。

みはしハ御階に。まよそむとハそのあとをいへ

旦覆日之入去者御立之島爾下座而嘆鶴鴨

あさぐもりひのいりゆけばみたてしのしまにおりゐてなげきつるかも

旦覆ハ天霧の借字。ちつくバあさぐもりと訓べし。日の入ちがひ茅ゆけバと

いふハ茅律と日の入ハ夕ましてあれ約日の入とよあるハ日暮の東方ゆく

ままでしたバ朔月のむぐしとちれると、係よ分れるまへバ殺のうちよく

とおく日の入るとりまへとハ云へいとほしむ。係ちうるよ立の下為の字

落ちるか宮の御地を念ちく、日暮ゆけバ天傳ふ日との会へ下つと

みるなるべし

旦日照島乃御門爾欝悒人音毛不為者真浦悲毛

あさひてるしまのみかどにおぼほしくひとおとしせねばまうらがなしも

おぼしくハおぼつかなく、みさまい迷への御にと人音のせねバ忘れてハ前が

つらうしおもちまえ、真ハまつとるつりうてそ、うらしハんと

真木柱太心者有之香杼此吾心鎮目金津毛

まきばしらふときこころはありしかどこのわがこころしづめかねつも

古さきうら柱能、丈夫ハまうせく、おしひきつがふこのたりしさとりよ

毛許呂裳遠。春冬。片設而。幸之。宇陀乃大野者。所念武鴨

けごろもを。はるふゆかたまけて。いでましし。うだのおほのハ。おもほえんかも

和名抄裘加波古路毛と云へ注ふ称衣をもとをいひしハ称なりとへり皮衣

とも云へるのむかしの衣をふるを遠れるなるへし、片役の片ハ語のたすけ、取のやうな

るへし、まつふバとるとまけし訓べし、毛衣を役へるとを之片役とハまをして、

まゐいりし字ハ文もゆれど、衣を活と君をいひくる仮のすへしくの

衣を着くのきとかくとへなれバ此まるかたへりしおもえず、うぶ

の大野ハおほむし宇陀の安騎野なく人麿の注釈くし討ハ

まゐりとよみし注釈のすをまてもいひしくよめバ此より注釈乃

ろすをおもひ出てハ養ひなりし此と歎くる也

朝日照。佐太乃岡邊爾。鳴鳥之。夜鳴變布。此年已呂乎

あさひてる。さだのをかべに。なくとりの。よなきかはらふ。このとしごろを

鳴声のハ鳴鳥のなくといふと思へり舎人等の歌かなしくきのとのゐ

吉野と世ふよる鳴鳥の夜へいへり、かなしみすよる夜居者といへ

るよ同しく結有の支朔をいふさく四月より四月まで一周のあるま

をいへるまにといへるを

八多籠良家。夜晝登不云。行路乎。吾者皆悉。宮道叙為

やたこらが。よるひるといはず。ゆくみちを。われはことごと。みやぢにぞする

家ハ家の仮字なり、やたこらハ奴等也、神功紀ニ摩比苔破于摩臂

若奴知野伊徒姑播茂伊徒姑奴池、このやいつてよ同じきをつとめるよ

通へしていひしよやいかしくハ其ハ宜の語の続き里人どもが通ふと云

おのこをつくへの道てもあるハ思ひのそぬるそのれしなぞくそこうく、

契沖云、八とよみくるごろなりんかへるとかして口とるそのこと

いへるまやといへり、宮ち従臣ハ馬の語をよくはくこうまちるべし

猿飼るといへり姑捨日記にもみえ宇治拾遺にもみえたる處ある
なほまつぎらかしおきていへり猶考べし

右日本紀曰三年己丑夏四月癸未朔乙未薨

柿本朝臣人麻呂獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首幷

短歌

こゝのた或本を引たるぞ正しかるべし此みこは天智天皇の皇女にて、
此皇女の御兄忍坂部皇子よ薨給ふよしいふべきをかくいへるは御夫婿
の事の有様とのみいひて、この皇子の事なし、忍坂部皇子の五字は、
次の明日香皇女木𤭖殯宮之時の端詞に有しがまぎれ入しものぞ

飛鳥明日香乃河之 上瀬爾 生 玉藻者下瀬爾
とぶとりのあすかのかはのかみつせにおふるたまもはしもつせに
流觸 經玉藻成 彼依此依 靡相之 嬬乃命乃
ながれふらばへたまもなすかよりかくよりなびかひしつまのみことの

烏ヲ今鳥ニ誤

阿ヲ今何ニ誤

多田名附柔膚尚乎劔刀 於身副 不寐者 烏玉乃
たゝなづくやははだすらをつるぎたちみにそへねねばぬばたまの
夜床母荒良無一云阿礼奈牟 所虛故名具鮫魚天氣留敷藻相
よどこもあるらむそこゆゑになぐさめてけだしくもあふ
屋常念而一云公毛相哉登 玉垂乃越乃大野之 旦露爾 玉
やとおもひてたまだれのをちのおほぬのあさつゆにたま
藻者湿打夕霧爾衣者 沾而 草枕 旅宿鴨
もはひづちゆふぎりにころもはぬれてくさまくらたびねかも
為留 不相 君故
するあはぬきみゆゑ

流觸經ハ字のごとくながれふらばへと訓べし、古事記那迦都延爾淤知布(ナカツエニオチフ)
良婆閇(ラバヘ)とあるに同じ、流ふらばへを延云へと云、なびかひしはなびきあひしの約

あけしと御かたり、嬬ハ借字にて夫のこと、さなつくハ枕詞、やハたゞそへたる
のちなハ、それをといふ詞にて添へし、あしくハ君の御記に背、つまごち
枕詞、身はかへねども夫君の葬後皇女の仮殯宮をいふ、ぬばたまの枕詞、
あさとこも荒らんハなへ殯宮しあけの床をあやまりたり、と謹むるなく、
殯る後も一周ハまかりしわれがつくいで、或本のあれなんも同じこと、
と、阿と何ま似るハ誤れ、そこでゆるすにおそれあるく、右具鮫魚天氣酒
えと、又花云魚ハ兼の誤、留ハ田の誤なく、なぐさめかねてげにしくもと
訓べしといふて、志てのあるくもしれバ或本の公もおハやとまぐさてよくつづけたり、
ちゞめのまくみえてハこゝろえぞて、いづれの枕詞、をちのたゞて、とこをとよめるハ
見えし、天智紀小市岡上陵、また天武紀孝徳越智、武に越智崗上陵 高市
郡あすかハ皆同じ、斉明天皇の御陵也、されバをちと訓べきこと、むしろ
ハ常也、続きちハたゞに、皇ざりをまうしハ、こと字を添ゆるとらべきにあり

今部ヲ脱

越智まで送るといふ、藁枕枕詞、ひぬれども在るあたらたるなれバ、あれなる君等
あとのことも、あへ新喪に墓所の傍に廬作りて一周の間人しれて守ら
せ、あかりしらしめしやどりをしともいふ、次宜于墓所といふも舒明紀
にみゆ

反歌

敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛将相八方
しきたへのそでかへしきみたまだれのをちのにすぎぬまたもあはめやも

一云乎知野尓過奴

しきたへの枕詞、袖かへしハ袖を交また、袖さしかへてとよめるを、いづれの枕詞、
たまだれハ既にましてをちもあそなる意をつゞめていふなるてをちの
やしハ又ハあはんこのといふなく

右或本曰葬河島皇子越智野之時獻泊瀬部皇女歌也

日本紀曰。朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑浄大参皇子
川島薨
明日香皇女木缻殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首
并短歌
明日香皇女ハ天智天皇の皇女にて文武天皇四年四月薨し
給へるよし紀に見ゆ。木缻ハ式和名抄に廣瀬郡にあり。此次城上殯宮
とあるも同じ所なるべし。夫君の歎き給ひ、木の缻へ住ましめ給ひしにや。上の河嶋
親の皇女の御兄弟へ給ひしと同じさまなれば、此君ハ夫君忍坂部皇子
へ嫁ぎ給ふなるべし。端詞人麻呂の下に献忍坂部皇子歌と有りしが脱し
たるべし
飛鳥。明日香乃河之。上瀬。石橋渡。一云石浪 下瀬。
とぶとりのあすかのかはのかみつせに。いしはしわたし。しもつせに。
打橋渡。石橋。一云石浪 生靡留。玉藻毛叙。絶者生流。

鳥ハ島ノ誤

うちはしわたし。いしなみに。おひなびける。たまもぞ。たゆれば。おふる。
打橋。生乎為禮流。川藻毛叙。干者波由流。
うちはしに。おひををれる。かはもぞ。かるれば。はゆる。
いしばしハ石を敷て並べ渡せるにて、書紀にあまのがは伊之奈弥許可婆とよ
める歌も是に同じ意なるべし。一本の石浪も借字にて石並之。打橋ハ
板をもて作りて川の中に渡せるをいふ。宣長説打ハ借字にてうつしの
の略なるべしと云り。遷しかへて行き来ゆるにてうちはしといふ。
生靡く、生ひなびくなり。石の並びてあるを並べてならびてあるとい
ふを縄くるべし。たまもハ玉藻にて、是をもて見て、たゆれば生ふるとい
ふ藻の靡くことを云。此島ハ鳥の誤なるべし。巻二十にまべきハ花咲乎遠
里にまきされば手呼理尓とやなどあるにつきても、
の意と考の歌にあらし。川藻かぞかるれば生ゆるも詞とかくへるのに

かくすることも二所に

何然毛。吾王乃。立者。玉藻之如。許呂臥者川藻
なにしかも。わがおほきみの。たゝせば。たまものごとく。ころぶせばかはも
之如久靡相之。宜君之。朝宮乎。忘賜哉。
のごとく。なびかひし。よろしききみが。あさみやを。わすれたまふや。
夕宮乎。背賜哉。
ゆふみやを。そむきたまふや。

立せバたまもの立ゆるがごとく、ころぶせバ、下ふし
自伏とかく、ころびふしたるをいふ、よろしききハ、よろしきハあらゆるよし備はれるを
いふ、朝夕をとかくいふハ清みなかなけれバや[illegible]、先二所に

宇都曽臣跡念之時。春部者花析挿頭。秋立者。
うつそみと。おもひしときに。はるべは。はなをりかざし。あきたてば。

黄葉挿頭敷妙之。袖携。鏡成。雖見不猒。
もみぢばかざし。しきたへの。そでたづさはり。かゞみなす。みれどもあかず。
三五月之。益目頬染。所念之君與時時。幸而。遊
もちづきの。いやめづらしみ。おもほしし。きみとときどき。いでまして。あそび
賜之。御食向。木瓲之宮乎。常宮跡。定賜。
たまひし。みけむかふ。きのへのみやを。とこみやと。さだめたまひて。
味澤相。目辭毛絶奴。
あぢさはふ。めごともたえぬ。

うつそみとハ現身をいふ、まへハよかれもみぢかざしつゝて
ハ現をおいふハをしけの月の清遊をいふ、おの[illegible]神とがさもるを
よろしくて夫婦(メヲ)の親しきさまをいふ、[illegible]
いよよ[illegible]、先ハ愚按[illegible]

さて、みたむすふ挽詞、まのべの宮をさして八此遊ひなれし所ハ清御原と云
さるまりに、咲さりに挽詞、めでともまえぬハ、おひ召る宰の語しと云、拜ハ
借字のこと、先に明之

然有鴨。一云所已安之毛 綾尓憐。宿兄鳥之。片戀嬬。一云為乍 朝鳥。一云朝露
しかれかも。あやにかなしみ。ぬえどりの。かたこひづま。あさとりの。
往來為君之。夏草乃。念之萎而。夕星之。彼往此去。
かよはすきみが。なつくさの。おもひしなえて。ゆふつゞの。かゆきかくゆき。
大船。猶預不定見者。遣悶流。情毛不在。其故。
おほぶねの。たゆたふみれば。なぐさもる。こゝろもあらず。そこゆゑに。
為便知之也。音耳母。名耳毛不絶。天地之。彌遠長久。
せむすべしれや。おとのみも。なのみもたえず。あめつちの。いやとほながく。
思將往。御名尓懸世流。明日香河。及萬代。早布屋師。
しのびゆかむ。みなにかゝせる。あすかゞは。よろづよまでに。はしきやし。
吾王乃。形見何此焉
わがおほきみの。かたみかこゝを

しかれかもハしかあれバかもの詞にて、まさて一本の[illegible]しものゝ
うなり、あやにかなしみハ先にも清御原へ夫君の語をよみをいふ、
ぬえとりの枕詞、かたこひづま、一本の志つのまの私ことり、ぬえとりの枕詞、
一本朝露とあるハ誤也、夏草の枕詞、おもひしなえてハ愁おもふ河の
姿を云、夕づゝの枕詞、かゆきかくゆきハ[illegible]を云ん、
大舟の枕詞、たゆたふみれバ、おゆみ[illegible]て、なぐさむる
心あらずてハ夫君の想を[illegible]とあるをこれしさく、こゝろをたの
ぐさむることもなし、せむすべしらやハせんかたしらやハせんかたもなしやせめ
て皇女の御名をだに、萬世に傳へむとて[illegible]て、為便知

之也、宜まゝ從此一句語ニ屬べし、せんせんをべをなふみとゝゝ又せんせんべ志ら
ふちぎもるべきなんとゝへり、杼のみもとのとゝもゝまぬゝでゝらんハ、言ゝなるに
同じからおつれども、詞のあやみ聞きねぬるにても、二つの歌ハ、せめてものゝ
なかとし趣もとりゆえいさきこえ、あめつちのゝくら、天地としたみもいく慕ひ
まゐらせんとぞ、語ゝに、かゝせるハ、皇女の語ゝに属するといふなん、
たしきやりのはしきやハ細しきよの累ゝまく愛ゝ詞、下のしハ助辭。
のゝ、考の別記ニ委し、あかおもゝきみハ皇女をさして、かくみゝうゝるを
ハ明日香河をとりつゝ宜まゝ、形見何の何ハ荷の借ゞ、かくみるゝこと
よ訓ゞ、ちゝと形見ゝはそのびゆかしとふへ通るゝこと以へるを

短歌二首

明日香川四我良美渡之塞益者進留水母能杼爾賀有萬思（一云水乃與杼爾加有益）

おもろのかゞれ志づのゝみやつゞて、せつのものせバ、なのかゝるゝみつゞて、のがるゝのあらまし
此川ニせきぞともむべかれバ皇女の語ゝ奴しともめきまゝらせんよしのゝえべき
かのさといふえ、のどハ一あのよどゝ同じいつまくよどむをいよ

明日香川明日谷（一云左倍）将見等念八方（一云念香毛）吾王御名忘世奴（一云御名不所忘）

あすゝかゞはあすだにみむと、おもへやも、わがおほきみのみなわすれせぬ
おもへやものおもへのゝゝハ附ていふゝ詞ゝくみなぐるなんやハのゝとのちゝに
今ハ見まゝるゝあるまじ、さるを、明日香川と見れバ語ゝのことわれ難きるゝと
一本のさくハ、この歌んぞ、おもへりもハ、よくの思へり、語ゝことゝさえあもゝ
かるへゝと

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

朱鳥三年四月日薨皇子尊ハ天武天皇の太子なり、あゝまゝ語

ひしが持統天皇十年七月薨給ひし人なるこれと悟て然してなるを、
皇のまゝ皇子なりし時、大友皇子との亂ありしを御軍の
ことを始めて平らげ給ひ、天原大政まをさせ給ひしべく此皇の世に
終れ給ひしを、とあるて、此陵式に廣瀬郡三立岡とあり、城上といふは皇の名
なるべし

挂文忌之伎鴨、一云由遊志計禮杼母 言久母綾爾畏伎、明日香乃
かけまくもゆゝしきかも、いはまくもあやにかしこき、あすかの
真神之原爾久堅能、天津御門乎、懼母、定賜
まがみのはらにひさかたの、あまつみかどを、かしこくもさだめたまひ
而、神佐扶跡、磐隠座、八隅知之、吾大王乃、所聞見為、
て、かむさぶと、いはがくれます、やすみしゝ、わがおほきみの、きこしめす、
背友乃国之、真木立、不破山越而、狛劔、和射見我

そともの国の、まきたつ、ふはやまこえて、こまつるぎ、わざみが
原乃、行宮爾、安母理座而、天下、治賜、一云掃賜而
はらの、かりみやに、あもりいまして、あめのしたをさめたまひ、
食国乎、定賜等、
をすくにを、さだめたまふと、

かけまくも云々ハ、心に懸て思ふもゆゝしく恐れみて申まり
ことゝいふハゆゝしきことハしるしといはまくもいはまくといふなり、真
神の原といふハ、下七首天武の御陵のことを先いへり、紀又ハ式に檜隈
大内陵と見ゆ、さて明日香檜隈ともあれバ、大内ハ即此神原の
小名なるべし、崇峻紀始作法興寺此地名飛鳥真神原亦名
飛鳥苫田とあり、天つ御門とハ、大宮をいふ、宮を神さびあがり
といふに對して、崩給ふをいふ、神さびハ神進(スサビ)の意にて、吾大

ここのこゝろは、是ハ天武の御代をしろしめすすめらぎをいへるなり、
美濃ハ大和の北なれバ背面といふ。先家主惣領、不破山ハ美濃不破郡之
此時よりはじめて関ハ置つらん、是ハ天皇初めて吉野を出まして伊勢
の桑名におはしましたる時、高市皇子ぞの東路つかはして、桑名
より美濃路野上の行宮へ幸の時、此山を越給ひしといふ。狛つるぎ枕
詞、わざみが原是も不破郡也、安母理いまして八天降之、和蹔(ワザミ)ニ皇子
のおはしまして近江の敵をまもらへ、天皇ハ野上の行宮におはしまして
とて、皇上よりもわざわざ度々幸して御軍のことをしろしめしたまふ
紀に見ゆ。天下をことごとく一本拂ひてをさめたまふ事をあらはし。食国を天下
も同じことなれども、こゝにハ文なり
鳥之鳴、吾妻乃國之。御軍士乎、喚賜而。千磐破、
とりがなく、あづまのくにのみいくさをめしたまひて、ちはやぶる。

人乎和爲跡、不奉仕、國乎治跡、一云掃部等 皇子隨、任賜
ひとをやはせとまつろはぬくにををさめとみこながらまけたまへ
者、大御身爾、大刀取帶之、大御手爾、弓取持之、御軍士乎、
バおほみみにたちとりはかし、おほみてにゆみとりもたしみいくさを
安騰毛比賜、齊流、鼓之音者、雷之、聲登聞麻低、
あどもひたまひ、ととのふる、つゞみのおとはいかづちの、こゑときくまで
吹響流、小角乃音母、一云笛之音波 敵見有、虎可叫吼登、諸人之、
ふきなせる、くだのおとも、あたみたる、とらかほゆると、もろびとの
協流麻低爾 一云聞惑麻低
おびゆるまでに、
爲ぶやく、惣領、御いくさ、軍人のことにて、伊勢尾張ハいふまでもなく東
海東山道の軍士をめしてまゐる紀に見ゆ。ちはやぶる惣領、人をやはせ

とハいふらやまと人と和せること云之、寒サ麻都呂倍奴比等乎母夜波之
とあれバやはせと訓べし、まつろはぬハしたがハぬ國といふ事、
古事記荒夫流神及麻都樓波奴人等とあり、まつろはぬといふも、
まつろハぬとおなじ古言の活之、一本國とあるハ、いづれにても
まつろへとハまつろはす波吉伎欲米つゝまつろへといふにおなじ、
みこながらハ神随と訓りて、皇子におはしながら皇のつかさま
任まして之、大御身まして、別高市皇子の御身之、あともひハ
率ひるといふ、紀に誘とあるをあともひと訓る、そのつゞみハ字士
鼓のふる鼓吹之、吹なせるハならせるに、和名抄大角波良
乃布江小角久太能布江とみえ、されバこゝハ小角の事なりしの綱
お後の例にても遠くハ一本のふえのねといふとみゆよし、あさみるさ
ハ虎の敵にかふかふといのれる様にておそれるゝ、虎かのこのハ清て読べし

成ハ盛ノ假下同

指擧有幡之靡者、 冬木成春去来者、 野毎、
さゝげたるはたのなびきハふゆごもりはるさりくれバのごとに
著而有火之(一云 冬木成春野焼火乃)風之共靡如久、 取持流弓波受
つきてあるひのかぜのむたなびかるごとく、とりもてるゆみはず
乃騒三雪落冬乃林爾(一云由布乃林)飄可毋 伊巻渡等
のさわぎみゆきふるふゆのはやしにつむじかも いまきわたると
念麻低聞之恐久(一云諸人見惑麻低爾) 引放箭 繁計久大雪乃
おもふまできゝてのかしこく ひきはなつやのしげくおほゆきの
亂而来禮(一云霰成曽知余里久礼婆)
みだれてきたれ、

冬木なし枝成ハ盛の假ちるべき事を既にいへり、つきてある火ハ咲るに火を
つけてやくといふ、一本にはるやく火のとあるよし、赤旗を火に

さまでに、ゆはずのさわぎといへり、一本由布乃林とあるハ布由の上下せるなり
なるべし、飄ハつむじと訓べし、和名抄に飄至無之加世とあり、又冬の林の
の梢をつむじてつむじの風まくに多くの弓弭の動くを譬ふ、いさゝき
のいハ発語也、矢のとぶハ見るなれバ一本の見まくまでゝ
みゝにきくとすべし、大雪の乱て来れといへり、きこえれバのバを思ふり、
一本あられなるを、ちるあられバもよし、をちハ彼方といふむがし

不奉仕。立向之毛。 露霜之。消者消倍久。 去鳥乃。
まつろはぬ。たちむかひしも。つゆしもの。けなばけぬべく。ゆくとりの。
相競端爾。一云朝霜之消者消言爾打蟬等安良蘇布波之爾 渡會乃。齋宮従。神風爾。伊吹惑
あらそふはしに。わたらひの。いつきのみやゆ。かんかぜに。いふきまどはし
之。天雲乎。 日之目毛不令見。常闇爾。 覆賜而。
しあまぐもを。ひのめもみせず。とこやみに。おほひたまひて。

定之。
さだめてし。
まつろはぬといへる上六句ハ敵をいふ、露霜のごとくハ命を捨てかゝる也、
ゆく鳥のごとくハ敵も我もおのれおのれ競ひ進むが如き、
あらそふはしハ争ふ間也、一本の朝霜のけなばけといふハまた
清きといふ如くなる也、風ハ神の息吹よりおこれバ神風といへるなり、
いぶきとつゞけたり、天雲を日のめもみせずといへるハ、天武紀天皇蹕
上の行宮におはしまして雷雨甚しかりしに天皇祈給へバ
やみつる事あるをおもふに、しかあれバ此御軍の時、神の志を助給ひしなるを
有べき事を、紀にて略しつらねバ傳へ失たしなるべし
水穂之国乎。 神随。 太敷座而。 八隅知之。
みづほのくにを。かんながら。ふとしきまして。やすみしし。

便ハ使ノ誤

埴ヲ今垣ニ誤

吾大王之。天下。申賜者。萬代。然之毛
わがおほきみのあめのしたまをしたまへばよろづよにしかしも
将有登。一云如是毛安良無等 木綿花乃。榮時爾。
あらむと。ゆふばなのさかゆるときに
水穂の国以下五句天皇の清まん、天の下申たまへバといふハ高市皇子の
太政大臣に任じたまひけるをいふ。まをしたまふとハ政を執申す義也。萬代
まで、一本志かもあらんとも同じ。まをしたまひいつまでも政を執給はん
といふ也。ゆふばなの栄ゆるとハ、像に譬へたまへるにていきほひさかゆるを
吾大王。皇子之御門乎。一云刺竹皇子御門乎 神宮爾。装束奉而。遣使。
わがおほきみみこのみかどをかんみやによそひまつりてつかはしし
御門之人毛。白妙乃。麻衣著。埴安乃。御門之
みかどのひともしろたへのあさごろもきてはにやすのみかどの

不得者ノ者ハ天ノ誤

原爾。赤根刺。日之盡。鹿自物。伊波比伏管。烏玉能。
はらに。あかねさす。ひのことごと。しゝじもの。いはひふしつゝ。ぬばたまの
暮爾至者。大殿乎。振放見乍。鶉成。伊波比廻。
ゆふべになれば。おほとのを。ふりさけみつゝ。うづらなす。いはひもとほり
雖侍候。佐母良比不得者。春鳥之。佐麻欲比奴禮者。
さもらへど。さもらひかねて。はるとりの。さまよひぬれば。
わがおほきみをみかどと、一本さすたけのとあるも同じ事也。神宮ハ殯宮也。
三も殯宮の事をいへり飾りつけて云々。遣使ハ遣使の誤なるべし。
つかはしハつかへ給ひし也。御門の人ハ舎人を云。白妙の麻の衣ハ喪
服をいふ。埴安は原なる香具山の宮を言ハ即ち見えたる也。埴安の
前なる野原をいへり。あかねさすて、天下ものぬばたまの枕詞。いはひふし
てハ、いハ發語にて、鹿のごとく這伏といふ也。大殿をふりさけみつつハ

座ヲ今座ニ誤

あまたあれバ論つの介の舎に侍るもれバ敬のるをおかぎつんやりもく
係言なるん、うづらなすハ枕詞、いハ發語にく、韓の如く這めぐる也、さも
らひねバハ句のつゞきよろしからず、宮もとハ不得の下ち八字の誤に
てさかもひかねてなりけりといへるぞよき、まろの枕詞、うづらひさつゆ
よめるハわろし、さもらひかねれバ、さもらひぬるといふを、さまよふハ
紀に吟の字をよめり、なげき吟ふ也、舎人が法つ或ハ陛階のかたを
めぐるさま也

嘆毛。未過爾。憶毛。未盡者。言左敝久。
なげきもいまだすぎぬにおもひもいまだつきねバことさへぐ
百濟之原從。神葬。葬伊座而。朝毛吉。木上
くだらのはらゆ、かんはふりはふりいましてあさもよしきのへの
宮乎。常宮等。高之奉而。神隨。安定座奴。
みやをとこみやとたかくまつりてかむながらしづまりましぬ
雖然。吾大王之。萬代跡。所念食而。作良志之。
しかれどもおほきみのよろづよとおもほしめしてつくらしし
香来山之宮。萬代爾。過牟登。念哉。天之如。振放
かぐやまのみやよろづよにすぎむとおもへやあめのごとふりさけ
見乍。玉手次。懸而。将偲。恐有騰文
みつゝたまだすきかけてしぬばむかしこけれども

いまだあねバ此ねバの句の下、さハあらじとおもふといふ詞を略る
古言の例なり、つきねバといひて、つきぬものをといふと同じ、すなハち
此八歌にいくつもあり、ねバ此ねめる歌けの風なり、もしくハ
といへるおもねバ也し、ことさへぐ枕詞、くだらの原、此原ハ香山宮
よりなるべし、あさもよしいはましてハ言まての略く、紀にもよのし枕詞、

高之奉而の之の字久の語にて、たてまつりてとあらしめその例によりて
しるしとみえはよしなし、宮出流高之の二字定を語るならん、上の
長言に常宮跡定賜とあるといへるをもみるべし、萬代まで定んとする
やうのことやうは例の語る詞にて、又失めやく、百代とほぐ祝られし言
なれば失る代あらじ、光をもちて清かくみとあふぎみんとあらんとせ、

短歌二首

久堅之天所知流君故爾日月毛不知戀渡鴨
ひさかたのあめしらしぬるきみゆゑにつきひもしらずこひわたるかも
天しらしめるは天子天原石門を开きといへるにひとしく、薨御し皇
子をさせ、皇太子は天皇に副しくなれば、君ゆゑには君なるまの
そのごとく、しらずはしらずあのきがくなしむは例く、さて此皇子なるまでによ
是世はとこやみゆくちて月日のなきしおぼえて恋ふまさといふく、

日月ともわかず宮に仕へてつかへしと訓べし
埴安乃池之堤之隠沼之去方乎不知舎人者迷惑
はにやすのいけのつつみのこもりぬのゆくへをしらにとねりはまどふ
是は堤にこもりし水の流れ行かぬを舎人の行ん方をまつらぬ諭るに云へ

或書反歌一首

是は左注にいへるなるべし
哭澤之神社爾三輪須恵雖禱祈我王者高日所知奴
なきさはのもりにみわすゑのめどもわがおほきみはたかひしらしぬ
古事記香山之畝尾木本名泣澤女神とみえ、かくれは香山の麓のやう
なるを祭れる社也、祈るとて高市皇子の薨るを傷みて云、
みわは酒を醸る瓱をいふ、又醸る瓱の事居するむねかみるとき
といへり、高日しらしぬは天をしらしぬるといふに同じ
右一首類聚歌林曰檜隈女王怨泣澤神社之歌也案日

本紀曰。持統天皇十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨

但馬皇女薨後穂積皇子冬日雪落遥望御墓悲傷流涕御作歌一首　此皇女和銅元年六月薨、下の和銅四年より下ハ寧楽宮と標せれど、一の巻の例によれバここに標こそあるべけれ

零雪者。安幡爾勿落。吉隠之。猪養乃岡之。塞為巻爾

ふるゆきハあはにふりそよなばりのゐかひのをかのせきならまくに

安ハ借の借字にて、さはにといふ事也。さはにハ多くといふ事にて、雪いたくなふりそといふ也。又或本に近江の淺井郡の人の言に、雪ハ淺きをあはといひ、深くいふ大きなるをばあはといふよし、いにしへより言ひつたへて、今も里の言に古言のこれるもありと、いふ人あり。此哥ハ冬の事なれバ、さる事にもあるべし。吉隠よなばりと

訓たれど、持統紀に菟田吉隠とみえて、今も初瀬山をこえて宇陀郡の方へゆく道に吉隠といふ村あり、又式にも吉隠陵在大和国城上郡とあれば、ここ吉隠の荘のあたりなるべし。猪養の岡ハ其荘の内にある岡の名なるべし。此あたりに皇女の墓あるなるべし。ゐかひの岡ハ、雪深くふらバ、皇女の墓へ行かよふ道をさへぎるべければ、雪深くなふりそと、よみ給へるなるべし

弓削皇子薨時置始東人歌一首并短歌　文武紀三年七月

薨ト見え、大和の任る皇子の薨ハ年おくハ此巻の次第を正して宇次の次に遠くいへるのみなれバ、まよひてしるしたる事いくつもあり。東人の下

作の字を脱せり

安見知之。吾王。高光。日之皇子。久堅乃。天宮爾。

やすみしゝわごおほきみ。たかひかるひのみこ。ひさかたのあまつみやに。

神随。神等座者。其乎霜。文尓恐美。昼波毛。日之
かむながらかみといませばそこをしもあやにかしこみひるはもひの
尽。夜羽毛。夜之尽。臥居雖嘆。飽不足香裳
ことごとくるゝまでよるはもよのあくるきはみふしゐなげゞどあきたらぬかも
・やすみしゝ吾君ハ天皇を申してたまふ事を御心にかけさせたまふハ、天皇ハましまさ八
給ひなりて天路をしめしてたまひしことを思ひそれとかしこみて起臥嘆く
とも此うちを思ひいひつゞけしのちなるべきをあきたらぬぞ、卌
あきたらぬとハかくみたまひてもあかぬといふ心也

反歌一首
王者神西座者天雲之五百重之下尓隠賜奴
おほきみはかみにしませばあまぐものいほへがしたにかくれたまひぬ
五百重が下の下ハ上の誤なるべし、室をもて下の裏ともいふと云

ふりてもいひてしてもを本を用ひてさとせり
又短歌一首
神楽波之志賀左射礼浪敷布尓常丹跡君之所念有計類
さゝなみのしがのさゞれなみしく〳〵につねにときみがおもほせりける
さゝなみハ近江志賀の地名、さゞれなみハ小波也、しき
しくとハよする浪のしきなるがごとくといふ事にて
いつもかくあれかしとおもほしけんといふ意なるべし
柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌
此二首の歌の前一首ハ思ひてかよふ女の死せるをいひ、次なるハ
子ありし嫡妻の死せるをなげくなるべし
天飛也。軽路者。吾妹児之。里尓思有者。懃
あまとぶや。かるのみちは。わぎもこが。さとにしあれば。ねもころに

日ヲ今目ニ誤

欲見騰。不止行者。人目乎多見。真根久往者。人應知
みまくほしけど。やまずゆかば。ひとめをおほみ。まねくゆかば。ひとしりぬべ
見。狭根葛。後毛将相等。大船之。思憑而。玉蜻。
みさねかづら。のちもあはむと。おほぶねの。おもひたのみて。かぎろひの。
磐垣淵之。隠耳。戀管在尓。度日乃。晩去之如。
いはかきふちの。こもりのみ。こひつつあるに。わたるひの。くれぬるがごと。
照月乃。雲隠如。奥津藻之。名延之妹者。黄葉乃。過
てるつきの。くもがくるごと。おきつもの。なびきしいもは。もみぢばの。すぎて
伊去等。玉梓之。使乃言者。梓弓。聲尓聞而。一云聲耳聞而 将言為便。
いゆくと。たまづさの。つかひのいへば。あづさゆみ。おとにききて。いはむすべ。
世武為便不知。聲耳乎。聞而有不得者。
せむすべしらに。おとのみを。ききてありえねば。

天飛や枕詞、輕ハ高市郡、みまくほしけどハ見まくほしけれどもの意、まねくハ卷一
浦さぶる歌にまねくのをばいやしく數多きよし、卷十七十八に見ゆ、ねもころさまよ
ねみハ數十九にきこゆ、ねまねく來れども同し、さねかづら、たぶさの轉
去らくをさんとせしさのみてえ、かぎろひの枕詞、いはかき淵のごとく、ハみゆるごとく
の岩の垣のごとくかこみてめぐれるを思ふ、隱とハいへばこもりてかくれたる
あるよし、わたつみのやくにいはと思ふまで、さてハ天智の、むづきのくだり、此詞
まづく集中書ざまよりて彼の字を雅せいたる枕詞也、梓弓枕詞、言らを
きゝて八言づれのことゆふてといふ、一本のおとのみきゝてとあることなるよし、
いはんまべき八同じことをかさねて次の言を起こせり
吾戀千重之一隔毛。遣悶流。情毛有八等。吾妹子之。
わがこふる。ちへのひとへも。なぐさむる。こころもあれやと。わぎもこが。
不止出見之。軽市尓。吾立聞者。玉手次。畝火

やまでいでみしかるのいちに、わがたちきけば、たまだすき、うねび
乃山爾。喧鳥之。音母不所聞。玉桙。道行人毛。
のやまになくとりのおともきこえず。たまぼこのみちゆくひとも。
獨谷。似之不去者。為便乎無見。妹之名喚而。袖曽振鶴
ひとりだにゝてしゆかねば、すべをなみ、いもがなよびて、そでぞふりつる

遣問かしなむやるとみつれど句のつゞきよろしからず、宜ちの例によるべし。なぐさむるをなくさめかくへり。軽の市、かるの里の塵をありといふべし。むかしそこ枕詞、なぐさむるのまでは句中の序なり。おもひきこえずは妹がありのまゝなく、玉だすきの枕詞、その市路を行人に、ひとりも妹に似る人のゆかねば、妹が名をよびて袖ふりてまどひしとなり

或本有謂之名耳聞而有不得者句。これはそふみゆる字也。謂之二字衍文か

短歌二首

秋山之。黄葉乎茂。迷流。妹乎将求。山道不知母 一云路不知而
あきやまのもみぢをしげみまどはせるいもをもとめむやまぢしらずも

上七秋山のもみぢあまたちりかくれて入し妹はまどひきまよひて道もしらずに似て一首よろし

黄葉之。落去奈倍爾。玉梓之。使乎見者。相日所念
もみぢばのちりぬるなへにたまづさのつかひをみればあひしひおもほゆ

妹がありし時使を待ゆきゝ通ひし日おもひ出しと、今つま又ありし時のおもひ使のまゐるとみれば逢し時のこゝろなるなり、なへは並みなり、考のおもひ出もあし

打蝉等。念之時爾。一云宇都曽臣等念之 取持而。吾二人見之。趍出之。
うつせみとおもひしときに、とりもちてわがふたりみし、はしりでの。

堤爾立有槻木之　己知碁智乃枝之春葉之茂之如久

つゝみにたてるつきのきのこちごちのえのはるのはのしげきがごとく

念有之妹者雖有　憑有之兒等爾者雖有　世間乎

おもへりしいもにはあれど、たのめりしこらにはあれど、よのなかを

背之不得者蜻火之燎流　荒野爾白妙之　天領巾

そむきしえねばかぎろひのもゆるあらぬにしろたへのあまひれ

隱鳥自物　朝立伊麻之氐　入日成　隱去之鹿齒

がくりとりじもの、あさだちいまして、いりひなす、かくれにしかば

うつせみハうつしみ同じく現身也、念之ハ思ふ人の事、取持而ハたの或本

に携手とあれバ、こハ手をたづさへて別べきなり、吾二人見しハ妻とともにみし也、

もとむるは門を出て本と云、槻ハつきのことで、此木の數々、こちごちハ此彼之、

春の葉のしげきがごとく、まちいたるやうなる事を集中多くいへり、

妹とつれ添ひ居れども世ハ同じ詞とまねるのみ、よの中をハ常なき世のなら

ひしをそむくことの得ざればなり、かぎろひのもゆる荒野とハ、廣き野をいふ、春ハ

陽炎のもゆるものなれバ、さいひて、妹を廣野に於て葬る地をいふなり、

白たへのてれ、此ハ葬送の旗をいふ、柩の前後左右に旗たてて持行

さまなり、鳥じもの、隱去之、朝立いまして、いりひなす、まで

ハ葬送のことをいふ

吾妹子之形見爾置　若兒乃　乞泣毎　取與

わぎもこのかたみにおけるみどりごのこひなくごとにとりあたふ

物之無者　鳥穂自物　腋挾持　吾妹子與二人吾

ものしなければ、をとこじもの、わきばさみもち、わぎもことふたりわが

宿之　枕付　嬬屋之内爾　晝羽裳　浦不樂晩之　夜者裳

ねしまくらづくつまやのうちに、ひるはもうらさびくらし、よるはも

今手ヲ乎ニ誤寸ヲ十ニ誤

氣衝明之。嘆友。世武為便不知爾。戀友。相因乎無見。
いきづきあかし。なげけども。せむすべしらに。こふれども。あふよしをなみ。
大鳥。羽易乃山爾。吾戀流。妹者伊座等人之云者
おほとりの。はがひのやまに。わがこふる。いもはいますと。ひとのいへば
石根左久見手。名積来之。吉雲曽無寸。打蟬跡。念之
いはねさくみて。なづみこし。よけくもぞなき。うつせみと。おもひし
妹之。珠蜻。髣髴谷裳。不見思者
いもがかぎろひの。ほのかにだにも。みえぬおもへば

うつそみとあるまゝなれバ、室ちて此女ハ玩物のごとく、父の注とるべきなん
枕の詞のなづさえといへり、鳥穂自物、とかくとよみて訓く説あれど、
此まゝのせつる或本に男自物とあり、一本集中雄自毛能負ひ抱ひ
といひ、又男士物屋恋つゝなきらんなどいひくるハゑとこゞとめて

すべきなれバ、鳥穂二字ハ鳥徳とある一字の誤なるべし、枕づくハ枕詞、
浦不楽くし、是も或本浦不怜晩とあるによりてうらさびと訓つべし、
いきづきハ嘆息く、大鳥の枕詞、羽がひの山、巻十かすがの野なる羽買山と
あれバ此山に葬しなるべし、石根さくみてハ岩が根を踏裂といふ
詞、さきを延てさくみといふ、祝詞磐根木根履佐久弥豆とあるを、
なづみハ先にいふ道のわびしきを煩参来てとあり、巻十八にくるしみに落名積
積天の露霜るをもいひて、こゝにハ山路の労をいふ也、
よけくもなきハ、よくもなきといふ、現の身とおもひし妹なれど、
逢ふなくむなしく山路に入しのひもなく、ほのかにだにみえぬと歎く也、

短歌二首

去年見而之。秋乃月夜者。雖照。相見之妹者。彌年放
こぞみてし。あきのつくよは。てらせれど。あひみしいもは。いやとしさかる

妻のなげかるゝ事あるへし、さるハ遠ざかるのさかひなる事ほし

衾道乎引手乃山爾妹乎置而山徑往者生跡毛無

ふすまぢをひきてのやまにいもをおきてやまぢをゆけばいけりともなし

引手山ハ羽がひの山と一つ所なるべし、耕雲考ニふすまぢを枕詞とし又枕詞と

挑ぐして、諸陵式ニ大和国山邊郡衾田墓といふあれバこゝ所なるべし、さらバ引手

の山ハ大和のひき田なるべし、むかしおもひよりあれど、右の長歌と合せみるに、

羽がひの山と一つ所ならでハかなはねバ、むかしハそれにハかなへず、今ハとて山ニ妹

を葬るべし、山路を歩へバ吾さへ生るあてもおぼえぬと悲しみの情をよめるなるへし

或本歌曰

宇都曾臣等念之時携手吾二見之出立百兄槻木虚

知期知爾枝刺有如春葉茂如念有之妹庭雖有恃有之

妹庭雖有世中背不得者香切火之燎流荒野爾白栲天

領巾隱鳥自物朝立伊行而入日成隱西加婆吾妹子之

形見爾置有緑兒之乞哭別取委物之無者男自物腋挿

持吾妹子與二吾宿之枕附嬬屋内爾旦者浦不怜晩之夜

者息衝明之雖嘆為便不知雖戀相縁無大鳥羽易山爾

汝戀妹座等人云者石根割見而奈積来之好雲叙無宇

都曾臣念之妹我灰而座者

うつせみと思ひし妹ハ灰となりてぞいますといへるなり、こゝの歌ハまさしくきこゆるにかなへり

灰とならせまさバ焼かれし灰ハ灰の場にて、こゝも文字の義にて火葬と

みえたれバ、ほかでに聞えたるにて、これ人の屍のまゝ

葬るもあれバ文武天皇四年三月始めて道昭を火葬せし

よりかく葬ることおこりしなり

短歌三首

去年見而之秋月夜雖度相見之妹者益年離
衾路引出山妹置山路念邇生刀毛無

おもひやるちからもなくかなしみける心なり、かゝるさまは後の訓に見えし

家来而吾屋乎見者玉床之外向来妹木枕

いへにきてわがやをみればたまどこのほかにむきけりいもがこまくら

玉床は枕をいふ。續後紀第十四甲斐国言、山梨郡人伴直富成女年十五にて郷人三枝直平麻呂に嫁、平麻呂死て後霊床を敬ふ存日のごとしと見えたる霊床のごとく、其十五の男に玉床とよめるは男之。是は羽易の山に妻はいますとゆきてありしかど見えざれば又此家に帰りて見るに、むかしさ床に枕はかたへにおしやられてあると也。古へ一周のほど床をとりはらはずありしなり。

吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

宣長云吉備津を考るに此采女の歌なるにあれども采女は出雲地をもて呼ぶ例あれど姓氏をもて呼ぶ例なし、又上反歌に志我津子とよめるを思ふに、近江の志我の津より出たる采女なるべし、然らば吉備とあるは志我の誤にて志我津采女なるべしといへり、時因誤り後に従ふ

秋山下部留妹奈用竹乃騰遠依子等者何方爾念居可栲紲之長命乎露己曽婆朝爾置而夕者消等言霧己曽婆夕立而明者失等言梓弓音聞吾母髣髴見之事悔敷乎布栲乃

あきやまのしたぶるいもなよたけのとをよるこらはいかさまにおもひをれかたくづぬのながきいのちをつゆこそはあしたにおきてゆふべにはきゆといへきりこそはゆふべにたちてあしたにはうすといへ

いへおもひゆみおきくわれもかのみしこともやしきをとこをとこへの。
手枕纏而。劔刀。身二副。寐價年若草。其嬬子者。
たまくらまきて。つるぎたち。みにそへねけむ。わかくさの。そのつまのこは。
不怜彌可念而寐良武。時不在。過去子等我。朝
さびしみかおもひてぬらむ。ときならず。すぎにしこらが。あさ
露乃如也。夕霧乃如也
つゆのごと。ゆふぎりのごと

古本念而寐良武の句の下、悔弥可念戀良武（クヤシミカオモヒコフラム）の二句あり、今本脱せるにや、秋やまの枕詞、志のぶるは名高きまにしてよむべし、たまよ行の枕詞、とをよるはたをやかなる義をいふ、なびきねれしなれどのだと思ゆるか、持づるの枕詞、おきさるはおさへて来むき齢をいふ、ねとまて者もは采女が死ぬるすべは霧と露の詞のかするとめて、きえさるをよせて

かへさるをまへといふ、おもみし、夜ほどは枕詞にみしとあれば、今もおなじみしと訓べし、つるぎたち、わかくさの枕詞、そのつまのこは夫をいへり、嬬は假の借字、夫をこくは前の采女なるべし、時ならずすぎにしからがは上のもさ命とたのむうへに、ゆるかなく死しといふ、室末つこを露乃如也夕霧乃如也の二の也は乃の字のごとくにて読べし、露のごと、夕ぎりのごとく訓べしといふ、いうきまでやの詞なくはそのひがこし

短歌二首

樂浪之志我津子等何（一云志我津之子我）罷道之川瀬道見者不怜毛
さゝなみのしがつのこらがまかりぢのかはせのみちをみればさぶしも

さゝなみ地名、罷道は黄泉の道を云、光仁紀、永手大臣の薨時の詔に美麻之大臣乃罷道（ミマシオホオミノマカリヂ）とも、こゝは黄泉の道をのたまへどもこゝは同じ、

宝ちこ、羅道の道ハ通の誤りにて、まつろてなるべし。そハまつろふぢて
かよふといへり、川瀬の道ハ大和のうちいづこの川かさしがたし

天數凡津子之相日。於保爾見敷者。今叙悔

そらかぞふおほつのこがあひしひは。おほにみしくは。いまぞくやしき

そらかぞふハ枕詞、おほよそといふが如しときこえ

讃岐狹岑島視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

狹岑ハ反哥に佐美とあればさみと訓べし、讃岐國那珂郡にさみ島あり
といへり、石中ハいそ磯邊をいふ、作るまで讃岐の下國の守なるべし

玉藻吉。讃岐國者。國柄加。雖見不飽。神柄加。

たまもよし。さぬきのくにハ。くにがらか。みれどもあかぬ。かむがらか。この

幾許貴寸。天地。日月與共。滿將行。神乃御面跡。

こゝだたふとき。あめつち。ひつきとともに。たりゆかむ。かみのみおもと。

面ハ回ノ誤

次来。中乃水門從。船浮而。吾榜来者。時風。

つぎてくるなかのみなとゆ。ふねうけて。わがこぎくれば。ときつかぜ

雲居爾吹爾。奥見者。跡位浪立。邊見者。白浪散動。

くもゐにふくに。おきみれば。しきなみたち。へみれば。しらなみさわぐ

鯨魚取。海乎恐。行船乃。梶引折而。彼此之

いさなとり。うみをかしこみ。ゆくふねの。かぢひきをりて。をちこちの

島者雖多。名細之。狹岑之島乃。荒礒面爾。廬作而見者。

しまハおほけど。なぐハしさみのしまの。ありそもに。いほりてみれば

浪音乃。茂濱邊乎。敷妙乃。枕爾為而。荒床。

なみのおとの。しげきはまべを。しきたへの。まくらになして。あらとこに

自伏君之。家知者。往而毛將告。妻知者。来毛問益乎。

ころぶしきみが。いへしらば。ゆきてもつげむ。つましらば。きもとはましを。

玉桙之道太爾不知欝悒久待加戀良武愛伎妻等者

たまぼこのみちだにしらずおぼつかなくまちかこふらむはしきつまらは

玉ほこハ枕詞、日月とたちかへるゆゑなり。神代紀に面足命又天足国足を

いふ書もあり。古事記に伊耶那岐命伊耶那美命にて

生伊預之二名島此島者身一而有面四毎面有名とて伊与讃岐粟土左の

四つの国の神の御名をいへり。伴のみやつこ、讃岐那珂郡、すなはち湊なる

べし。其つ風ハ瀬の満まる時起る風をいへり。志き波立、跡位ハ数重く

いへるを以ての借字也。巻十三にも跡座浪と書り。志き波ハ重波。かぢハ

かいと同じ。船のことを[illegible]漕ぐさまをいへる也。おそけど、ハ[illegible]

の略。名細しハよろしきなれのあらそしといへる也。荒礒面の面ハ回の誤也。

荒床ハ荒山荒野の荒のごとし。ころぶすハおのれと伏を云よしも也さて、

ころふてハ死ゝるといへり。ころぶふしてすてるハ家の妹がいとを[illegible]そし

きハうつくしむ心

反歌

妻毛有者採而多宜麻之佐美乃山野上乃宇波疑過去計

良受也

つまもあらばつみてたげましさみのやまぬのへのうはぎすぎにけらずや

うちくらけましハたべましと同しく、うけハ簑などのたぐひと同じく、

此花屋をうちぞすさべてうたぞの時ありまでつかさ人もなくさらん

さまなくして宮もいへり、皇極紀に原いそのへなどざるこかやくらかごふさ

多礒底とわらせかましのとぢ、此さげも同じ、くくぶ内膳式薦まこ和名

抄莪蒿於八木よめくそよめぐむぎいへるへ

奥波来依荒礒乎色妙乃枕等巻而奈世流君香聞

おきつなみきよるありそをしきたへのまくらとまきてなせるきみかも

かせるハ古事記八千矛神の哥、伊波那佐牟遠、又伊遠斯那世などのあま
たく、寐於すべてハ那とまさへきくをくをいふ

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作歌一首

式凡百官身亡者親王及三位以上稱薨、五位以上及皇親稱卒、六位以下
達於庶人稱死とあれバ、人麻呂ハ六位以下の人なりけんと知
るし、委ハ考一の考の別記をもてさとるべし

鴨山之磐根之巻有吾乎鴨不知等妹之待乍将有

かもやまのいはねしまけるわれをかもしらにといもがまちつゝあらむ

鴨山ハ石見の国なる山なるべし、巻るハ枕にする也、しらにとハ知ら
ずてといふに同し、考に不知をスト訓しハ、死ぬるとも知らずといふ也

柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首

且今日且今日吾待君者石水貝爾（一云谷爾）交而有登不言八

けふ〳〵とわがまつきみハいしかはのかひにまじりてありといはずやも

石川ハ鴨山のふもとにある川なるべし、貝にまじるとハ海へ流るゝなるべし、一本の
谷にまじりて考べし

直相者相不勝石川爾雲立渡禮見乍将偲

たゞにあはゞあひもかねてむいしかはにくもたちわたれみつゝしぬばむ

ただにあひみんとするハかたかるべし、せめて雲だに立わたれ、それを見つゝしのばん
てふなり、ゆくりなくもさかり遠き境なれバ、さもいふべし

是ハいまハのきハよりあひみんとおもふハかなはぬ事なるを、ことにいひなせる也

丹比真人　名闕　擬柿本朝臣人麻呂之意報歌一首

荒浪爾縁来玉乎枕爾置吾此間有跡誰将告

あらなみによせくるたまをまくらにおきわれこゝにありとたれかつげなむ

枕ま在ハ樹邊に在て、これにおきて坊かるゝ人ハ若さしゝ、これハ舟比丘人

多人麻呂の集にてよめる也

或本歌曰

天離夷之荒野爾君乎置而念乍有者生刀毛無

あまざかるひなのあらぬなきみをおきておもひつゝあればいけるともなし

右一首歌作者未詳但古本以此歌載於此次也　これハ依

羅娘子なとゝ擬てよめるならんゆ

寧樂宮

和銅三年奈良へ遷都なれバよの例にすべし、此標同元年の歌とも出すべし

和銅四年歳次辛亥河邊宮人姫島松原見嬢子屍悲歎

作歌二首　古事記孝行日女島、安閑紀元正紀媛島と見え、難波の邊と

見ゆ

妹之名者千代爾将流姫島之子松之末爾蘿生萬代爾

今親ヲ視ニ誤

いもがなはちよになかれむひめじまのこまつがうれにこけむすまでに

ひめ島の小松の末に苔のむすまで、妹が名をいひ傳へむとや

難波方塩干勿有曽祢沈之妹之光儀乎見巻苦流思母

なにはがたしほひなありそねしづみにしいもがすがたをみまくくるしも

ありそねのねハなけひて濡する頃、みなくいえんと云する頃へ、汝の二十

なが妹が姿の見えなくなるは潮の干するゆゑなれとなるも

靈龜元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并

短歌　續紀靈龜二年八月薨とも紀にハ志貴親王と書されつれバ萬葉

中の例によれバ皇子とあるべし、作者の名脱しなるべし

梓弓手取持而大夫之得物矢手揷立向

あづさゆみてにとりもちてますらをのさつやたばさみたちむかふ

高圓山爾春野燒野火登見左右燎火乎何如問者

たかまとやまにはるぬやくぬびとみるまでもゆるひをいかにととへば
玉桙之道来人乃。泣涙。霈霖爾落者。白妙之。
たまぼこのみちくるひとのなくなみだこさめにふればしろたへの
衣。埿漬而立留。吾爾語久。何鴨。本名言。
ころもひづちてたちとまりわれにかたらくなにしかももとなとぶらふ
聞者。泣耳師所哭。語者。心曾痛。天皇之神之御子之
きけばねのみしなかゆかたればこころぞいたきすめろぎのかみのみこの
御駕之手火之光曾幾許照而有
いでましのたびのひかりぞここだてりたる

梓弓以下五句的といはん序也、高圓山ハ春日の内にて、野火とはあるまで
こさめハ爰に霈の字を書、霈大雨也、日本紀私記大雨
比左米、ひづちハ埿に漬てぬるゝをいふ、(以下不詳)

考の説に此下、あるかぎりくらく句也、かくてくハかくるゝと也、かくれ
よしなきを聞て、諸ことせしかば、いふなるべし、何鴨
此下の説、かくれいぬるに、さておはれバ、ねのみしなかるゝ、かくれハ訓されたるの也、
短句に訓んまいれて、おかさきの神のごとくの跡にてものとつけてなる
たびハ神代紀秉炬此云多妣とあり

短歌二首

高圓之野邊乃秋芽子。徒開香将散。見人無爾
たかまとののべのあきはぎいたづらにさきかちるらむみるひとなしに
此歌二首とも、たのむ子ハあらじ、薨ましてのち、皆道によみ
なり

御笠山野邊往道者。己伎太雲。繁荒有可。久爾有勿國
みかさやまぬべゆくみちハこきだくもしげくあれたるかひさにあらなくに
志貴皇子の宮ある園の家の跡、あはれにものよむ

こゝろくハてだゞしと同じ許多久まてハ繁ことりの古言之

右歌笠朝臣金村歌集出

或本歌曰

高圓之野邊乃秋芽子勿散禰君之形見爾見管思奴幡武

三笠山野邊從遊久道己伎太久母荒爾計類鴨久爾有名國

萬葉集巻第二

巻二　追加

夜者毋夜之盡晝者毋日之盡、歌の心ハ晝波日乃久流留麻弖、夜者夜之明流寸食とよめるにおなじく、これもすべてよるハよのあくるきはみ、ひるハひのくるゝまでと翁のよまれつるハさる事なるのみ、宣長ハたゞす紀神代の巻に、伊毛波和須礼士余能許登基登迹とあるも、世のかぎりかぎりといふなるべし、のくまるハよのかぎり、ひのかぎりといふべし、日のかぎり夜のかぎりのこゝろといへり、此説まさりぬべし

010190519118